〒371 前橋市上泉町664－4
前橋市教育委員会管理部文化財保護室
TEL 0272－31－9531

寺田遺跡

前橋市立元総社保育所移転に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和61年

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、より健全な市街地の開発と住み良い街づくりの為の都市基盤の整備が各地で進められ、当地区は前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業が実施されています。このような市民の快適な暮らしを願う区画整理事業と埋蔵文化財保護の問題は常にうらはらの関係にあり、前橋市埋蔵文化財発掘調査団では、両者の調整に鋭意努めているところであります。

この調査は、区画整理の為移転する市立保育所建設に先立って発掘調査を実施したものであります。

寺田遺跡は、国府推定地東側外郭線に隣接すると考えられる重要な遺跡であります。この地から遠く周囲を見渡しますと、北に子持、北東に赤城、北西に榛名の諸山が並立し、東に利根川、南は広大な関東平野へと続いている。この地こそまさに山紫水明、四神相応の地として古代人が国府の適地と選んだのもうなずける気がします。調査の結果古墳時代から平安時代に至る遺物及び遺構が確認された。遺物は、杯、甕、埦及び羽釜等と木製品の杵、椀•杭等多数検出された。遺構は、榛名山二ッ岳火山灰（ＦＡ）降下後の溝が確認された。

この調査を実施するに当り終始御協力頂いた前橋市民生部福祉事務所、建築部建築課、都市再開発部区画整理課、及び猛暑のなか直接発掘調査に携わった作業員の方々に厚く御礼申し上げます。

最後に本調査報告書が一人でも多くの方々に活用され、地域の歴史解明の一助となれば幸いであります。

昭和６２年３月３１日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長　関口和男

例　　言

1. 本書は、前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業に係わる、昭和６１年度前橋市立元総社保育所移転に伴う寺田遺跡発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、前橋市元総社町１００番地１０他５筆に所在する元総社保育所建設予定地部分について実施したものである。
3. 調査期間は昭和６１年６月１日～９月３０日にわたって前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　奈良三郎）が実施した。
4. 調査担当者、福田紀雄（前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係長），浜田博一（前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係主任），高橋正男（同），前原　豊（同），金子正人（スナガ環境測設株式会社 埋蔵文化財調査部長）。
5. 本調査における出土遺物は、一括して前橋市教育委員会が保管している。
6. 本書はスナガ環境測設㈱の埋蔵文化財調査部が作成に当り、執筆及び編集の総括を金子正人が当り、遺物実測は佐々木智恵子，角田朱美が行ない遺物遺構のトレースは松岡和香江が行った。作業事務を柴崎信江が行った。
7. 発掘調査の安全管理に荻野博巳があたり、測量作業は須永眞弘（測量士第５２６１４号）が指導にあたった。
8. 調査に際して多大なる御協力を頂きました前橋市民生部福祉事務所、同市建築部建築課及び都市再開発部区画整理課の方々に厚く御礼申し上げます。
9. 本遺跡の調査及び整理に当たって下記の方々の御指導を頂きました。
   群馬県教育委員会文化財保護課，群馬県埋蔵文化財調査事業団，群馬大学教育学部新井房夫地学教授，　高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係，大胡町教育委員会，元総社保育所 飯島慶子園長，野中孝吉。
10. 調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝いたします。
    新井恒喜　石川サワ子　岩田四郎　河西三明　加藤八重子　門倉喜代美
    金井福治郎　小林康典　近藤充郎　須田シゲル　原澤政雄　田村光子
    辻みつる　長谷川千代乃　長谷川とめ　平出トミ子　柳原久仁江

凡　　例

1. 各遺構の略号は次の通りである。

   D－土坑　　W－溝状遺構

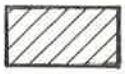
2. 各遺構実測図の縮尺は、平面図、土層断面図１／40を原則とした。

3. 遺物実測図は１／３を原則とし、木製品及び大形甕については１／４～１／10を使用し明示した。

4. 遺構及び遺物挿図中のスクリーントーンは次のことを表す。

……　灰釉陶器の施釉部分

……　内黒処理の内黒部分



……　地山

5. 寺田遺跡では、北西隅を基点とする４ｍグリットを設定した。

   本文中の「Ｇ－５」は北から２４ｍ西から２０ｍの位置のグリットを示す。

目　　次

序

例言・凡例

第Ⅰ章　発掘調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境 …… 3

　第1節　遺跡の立地 …… 3

　第2節　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　調査の方法 …… 9

　第1節　発掘調査の方法と進め方

　第2節　地形及び標準土層断面図について

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物 …… 13

　第1節　第1調査区の遺構 …… 13

　第2節　第2調査区の遺構 …… 14

　第3節　第3調査区の遺構 …… 23

　第4節　出土遺物の実測図 …… 23

　第5節　出土遺物の観察表 …… 38

第Ⅴ章　まとめ …… 45

　第1節　木製農工具について …… 45

　第2節　地形と遺構と遺物について …… 47

　第3節　その他 …… 47

付　表　目　次

第1表　上野国府に係わる諸論攷 …… 6

第2表　周辺遺跡 …… 7

第3表　大溝出土遺物観察表 …… 18

第4表　出土遺物の観察表 …… 38

挿　図　目　次

第　1　図　推定国府関係図 …… 3
第　2　図　市内の地形的区分図 …… 4
第　3　図　周辺遺跡の位置図 …… 11
第　4　図　標準土層断面図 …… 10
第　5　図　第1調査区平面図 …… 12
第　6　図　大溝平面図 …… 14
第　7　図　水口遺構平面図 …… 15
第　8　図　第2第3調査区平面図 …… 16
第　9　図　大溝土層断面図 …… 17
第　10　図　木製品実測図 …… 23
第　11　図　木製品実測図 …… 24
第　12　図　椀と木製品実測図 …… 25
第　13　図　木製品実測図 …… 26
第　14　図　木製品実測図 …… 27
第　15　図　木製品実測図 …… 28
第　16　図　出土銭拓本，木製品，小型土器，瓦実測図 …… 29
第　17　図　特殊遺物・瓦の実測図 …… 30
第　18　図　甕・杯・砥石実測図 …… 31
第　19　図　紡錘車・杯・高杯実測図 …… 32
第　20　図　須恵器杯・皿・高台付椀実測図 …… 33
第　21　図　高台付椀・甕実測図 …… 34
第　22　図　壷・羽釜・坩実測図 …… 35
第　23　図　壷・杯蓋・長胴壷実測図 …… 36
第　24　図　須恵器大甕・杯蓋・長頸壷頸部実測図 …… 37
第　25　図　子日手辛鋤図 …… 46

図　版　目　次

図版　1　第１調査区（Ａ－Ｏ～Ａ－１グリット方向を望む）

図版　2　第３調査区作業風景

図版　3　大溝全影空中撮影第３調査区全景

図版　4　第１調査区土坑－２土層断面　第１調査区全景

水口遺構第２調査区全景　第２調査区水没状況　遺物出土状況No.19

図版　5　遺物出土状況

No.１８，No.１２，No.１５，No.１　ニセアカシ，柳株出土状況

図版　6　遺物出土状況

No.２４，No.２２，No.８１，No.１３，No.９１，No.１０１，No.１２０

図版　7　遺物出土状況

No.９２，No.５２，No.１２４，No.１１１，No.６６

Ｇ－４グリット獣骨出土状況

図版　8　遺物出土状況

No.１０８，No.６０，No.１０５，No.１１０，No.８０，No.９０

図版　9　椀、種子、木製遺物

図版１０　木製遺物、馬歯、ヒョウタン果皮、小瓶、青磁埦

図版１１　小型特殊遺物と瓦と杯

図版１２　杯、砥石と紡錘車

図版１３　杯、高杯、須恵器杯

図版１４　小型埦と皿、杯

図版１５　高台付埦、羽釜、甕、壺、坩

図版１６　壺、杯蓋、長頸壺肩部と頸部

第Ⅰ章　発掘作業に至る経緯

前橋都市計画事業元総社（西部第三明神）地区土地区画整理事業の実施に伴う元総社保育所の移転に先がけ、埋蔵文化財の包蔵地であることから前橋市福祉事務所と協議を進めていたが昭和６１年５月２６日～同年８月３１日までの調査期間をもって施設の建設によって埋蔵文化財が破壊される恐れのある部分について、発掘調査することになった。（その後、調査区域内の家屋移転の実情に合わせ９月３０日までの期間になった。）

―― 作　業　日　誌　よ　り ――

5.２６　市役所にて打ちあわせ。

２７　重機搬入、安全対策として防風ネット設置、調査事務所の資材搬入

２８　プレハブ建込み。

２９　電話電気の設置、木製品保存ケース搬入

３１　調査現場周辺居住者に工事の件連絡訪問をする。

現場事務所用水道設備設置

6.　３　発掘作業用具搬入

４　第１調査区表土掘削　調査開始

５　ガス設備設置

６　座標軸決定

７　グリット設定、全体遺構実測開始（平面図1／100）

１０　水準点測量ＢＭ　１１0.00メートルを設置す。

7.　２　昨日の雷雨により調査区水没す、北面他２箇所崩壊す。

４　通学児童の安全確保のため元総社小学校訪問

１４　第１調査区調査完了の検査終了後　埋戻し開始

第２調査区表土掘削開始

１５　第２調査区安全対策用防風ネットを張る。

１７　第１調査区埋戻しほぼ完了、水準点測量　ＢＭ１１0.50ｍ　設置

２８　Ｆ－１0，１１グリット内の溝発掘開始

8.　８　第３調査区　関谷氏、引っ越し始まる。

１７　第二調査区全域雷雨により水没す。

（水中ポンプ３台で汲出しに２日掛かる。）

２２　関谷氏引越し完了　（家屋の解体始まる。）

２７　第３調査区盛土部の掘削開始

２８　第３調査区表土から水田床面迄，掘削開始

２９　水田床面迄掘削終了

9.　1　水田床面からＢ軽石上面まで掘削

5　縦杭数本確認される。

6　種子多数発見される。

１９　新井房夫群馬大学教授来跡

２９　発掘作業完了

市教育委員会より埋戻しについて転圧するように指示あり。

３０　埋戻し開始、安全防護柵取外し、資料及び掘削用具積込、マイクロバス，２ｔダンプ，キャリーダンプを使用

１０.　1　埋戻し作業、遺物の注記，土器洗い。

2　埋戻し作業、遺物の注記，電源切る。

3　フェンス用パイプ、出土遺物，食器棚等搬出、水道を止める。

4　トイレ運搬　マイクロバス移送、２ｔダンプで木材，石材，水道，ホース等搬出

6　プレハブ解体、電話の取外し、ユニックで木製品収納水槽を本社へ。

7　木製品収納水槽ユニックで本社へ移送。

第Ⅱ章　遺跡の立地と歴史的環境

第１節　　遺跡の立地

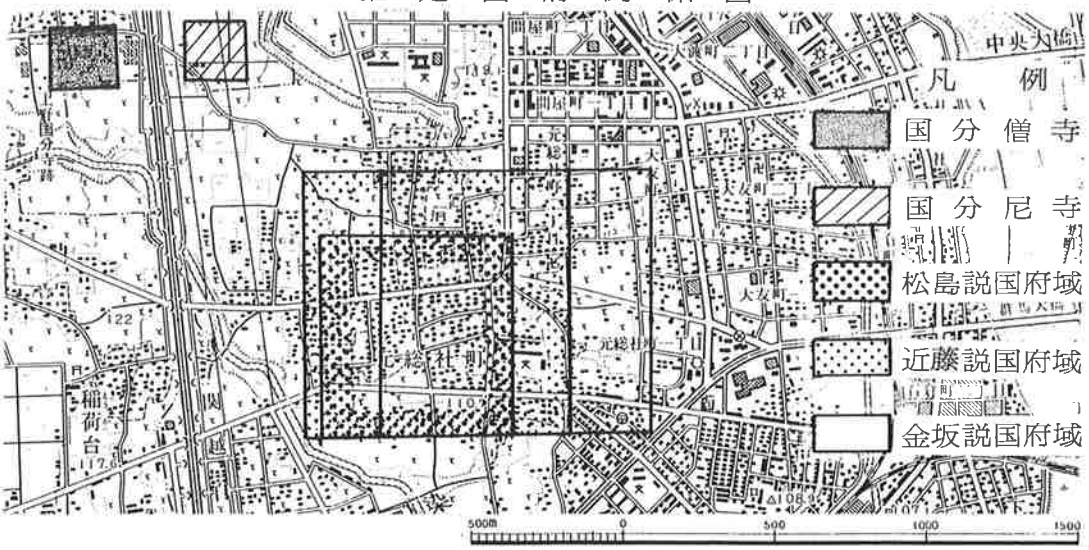
寺田遺跡が所在する前橋市元総社町は、前橋市役所から西方に約２Kmのところにある。当遺跡の南約１００ｍには主要地方道、前橋・安中線があり、さらに南約６００ｍには国道１７号線が北東から南西に通っている。この２道の間を二分し前橋・安中線に並行して推定東山道[(1)]が安中方面へ伸びている。当遺跡は西側に牛池川を挾んで元総社小学校に続く上野国府推定地[(2)]の東側に隣接する。

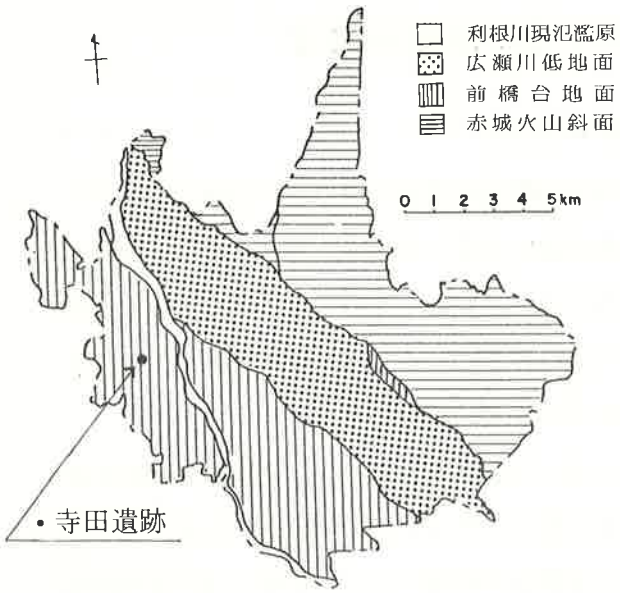
この、前橋台地[(3)]を構成する地層は、上部から表土層，水成ローム層，火山泥流堆積物，砂礫層となっている。火山泥流堆積物により平坦な前橋台地の原面がつくられ、この堆積物により、いたるところに湿潤地が形成された。前橋台地は清里陣場[(4)]地域では榛名山からの火砕流や土石流により緩斜面形を作り上げているが、概ね平坦な台地面といえる。榛名山麓に源を発する中小河川[(5)]は東南方向に並走する。寺田遺跡はその一つの牛池川左岸に位置し氾濫原と考えられる。

註　(1)　近藤義雄　「前橋の歴史」（古代東山道と群馬駅）　1986年
　　桐原　健　　群馬の遺跡「アズマへの道，アズマからの道」
　　1985年煥乎堂

第１図

推定国府関係図





第２図　市内の地形的区分図

(2)　元総社明神遺跡Ⅰ
（第３図推定国府関係図）
前橋市教育委員会　１９８２年

(3)　尾崎喜佐雄、新井房夫　他
前橋市史第Ⅰ巻１９７１年前橋市

(4)　西田健彦、中沢悟　他
清里陣場遺跡　１９８２年
群馬県埋蔵文化財調査事業団

(5)　(1)に同じ

第２節　　歴史的環境

寺田遺跡周辺には、縄文・弥生時代遺跡の報告は数例[1]にとどまり、この時期の解明は、後日の調査報告を待たねばならない。

本遺跡地は、牛池川の氾濫原に出来た低湿地帯に埋蔵された、土器・木製品・種子・石製品及び自生植物と動物の骨等の遺物が収拾された。

この周辺が一躍時代の脚光を浴びるのは古墳時代からである。周辺遺跡については第２表のとおりである。特記すれば1.5Km北東にある王山古墳[2]は、６世紀前半に造られた全長７２ｍ、当初円墳形式で構築された前方後円墳で、川原石を用いた積石塚である。北方約３Kmに６世紀末の総社二子山古墳が出現する。この古墳は全長９８.８ｍ両袖型の石室を、前方部，後円部双方に有し、副葬品については文政２年開口時・元景寺住職の記録[3]に詳しい。巨大な輝石安山岩で横穴式両袖型石室をもつ愛宕山古墳、主軸の長さ７０ｍの遠見山古墳、また７世紀末の宝塔山古墳、蛇穴山古墳[4]は仏教文化の影響を強く受けている。

宝塔山古墳の南西約８００ｍに法起寺式伽藍配置と考えられている山王廃寺[5]塔心礎がある。この石造技術は宝塔山、蛇穴山両古墳の石室と同系列の加工方法[6]と考え

られており、大化２年（６４６）詔ニ曰ク，厚葬ヲ戒ム[7]とありながら上野国にあっては宝塔山古墳，蛇穴山古墳等が築かれている。この周辺では仏教文化が古墳文化と併存しながら開花した様子が窺える。

奈良・平安時代になると、当地域は国衙や国分寺の建設とあいまって、古代上野国における政治・経済・宗教・文化的中心地であったことをものがたっている。国府については調査例と諸論文があるが確定するに到っていない。[8] 国分寺については続日本紀に見られる上野国関係文書[9]により天平勝宝元年には完成したものと思われる。

註

(1)	「清里南部遺跡群」	前橋市教育委員会	1980年
	「大八木遺跡」	高崎市教育委員会	1981年
	「正観寺遺跡群」（Ⅰ，Ⅱ）	高崎市調査報告書	1979，1980年
	「日高遺跡」	群馬県高崎市日高遺跡の調査、考古学ジャーナル152号 1978　日高遺跡Ⅰ，Ⅱ高崎文化財調査報告書第10・17集	1979，1980年
	「小八木遺跡」	小八木遺跡報告書Ⅰ，Ⅱ高崎市文化財調査報告書第8，15集	1979，1980年
(2)	王山古墳	前橋市教育委員会松島栄治	1973～74年
(3)	元景寺文書	「前橋市史」第1巻	1971年前橋市
(4)	「横穴式古墳の研究」	尾崎喜佐雄	1966年
(5)	山王廃寺	「前橋市史」第1巻	前橋市
(6)	尾崎論文	愛宕山，宝塔山，蛇穴山古墳等の巨石を用いた豪荘な横穴式石室	7C第3四半期
(7)	「日本書記」巻25	646年大化2年	
(8)	「元総社明神遺跡」Ⅰ	岩田治男（上野国府に係わる諸論攷1982年）	

第１表　　上野国府に係わる諸論攷

著者名	論攷	掲載誌	発表年	国府推定地
都木　丑作	国府政庁の跡について	上毛及上毛人 第１２０号	１９２７	元総社の中央部、通称石神付近を政庁跡とする
近藤　義雄	上野国府の所在地について	史学会報第１冊	１９４７	遺跡，地名，文献，重要遺跡との位置関係の４つの立場から、上野国府の位置を推定し、林倉寺と昌楽寺を結ぶ線を北限とした方８町域とした。
	上野国府について	上毛史学第５号	１９５４	同上
	上野国府をめぐる地名	史学会報		国府に係わる共通な地名を詳しく考証
	上野国府を巡る古代交通路	信濃第３３巻 第２号	１９８１	これまでの発掘調査の結果から、昌楽寺東の南北に走る溝から西の地が有力な国府推定地となってきた。そこで南北の溝を東の外郭線と考え、その北東の基点を昭和４１年の発掘地におき、それより８町南の水路が流れる付近まで東の線とし方８町を求めた。
尾崎喜佐雄	国府推定地の発掘調査	前橋市史第１巻	１９７１	近藤説（旧説）をもとに発掘－それまで考えられていた範囲を西方にずらすことが妥当との結論。元総社小校庭と昌楽寺裏において官衙らしき掘立柱遺構検出。
金坂　清則	上野国府とその付近の東山道及び群馬，佐位駅家について。	交通の歴史地理（歴史地理学紀要１６）	１９７４	元総社付近の地割の検討から第１図のような推定線を導き出している。
松島　栄治	上野国府	歴史公論１０	１９７６	国分僧寺の東南隅から東へ６町、南へ６町とったところから、更に東と南へ６町ずつとった方６町を範囲とした。（第１図）蒼海城と重なる
峰岸　純夫	東道－東山道の復元－	佐波郡東村誌	１９７９	金坂説を西へ３町程ずらし、国衙の中軸線を本丸，二の丸と続く蒼海城の内郭と諏訪屋敷，瀬下屋敷，出雲屋敷，豊後屋敷とが接する南北の道路に設定し、国衙の８町プランを牛池川と染谷川の間におさめる。
川原嘉久治	推定上野国府跡地覚え書き試みＩ	鳥羽遺跡 月報　№.１６	１９８０	古瓦の分布、土居８町を思わせる八丁、正殿跡を示唆する丁ヤ、国倉の存在を窺わせる石倉等の地名から蒼海城を中心とした地域を想定。

(9)　上野国関係文書、　　倭名類聚鈔、上野国神名帳、上毛古墳綜覧、
上野国交替実録帳

第2表　周辺遺跡

地図上No.	遺跡名	所在地	時期	遺構・遺跡の概要
1	長久保古墳群	榛東村	古墳	円墳・前方後円墳S51～53年調査
2	清里南部遺跡群	前橋市青梨子町	平安	（縄文，平安，中世，江戸）平安時代の住居と遺物中心
3	総社二子山古墳	〃 総社町	古墳	全長98.8m前方部後円部に石室がありFP降下前後を示す。
4	愛宕山古墳	〃	〃	横穴式両袖型石室、家型石棺、巨石の壁は輝石安山岩の山石を使用
5	遠見山古墳	〃	〃	主軸の長さ70m墳丘南側には周濠の一部や葺石が認められる。
6	山王廃寺	〃	奈良平安	鴟尾、石製根巻石、心礎、緑釉の小瓶と皿　伽藍配置は法起寺式
7	村東遺跡	〃	古墳奈良	古墳時代、奈良時代の住居址と中世末期の薬研堀
8	宝塔山古墳	〃	古墳	54m× 49m高さ12mの方墳、横穴式石室は切石切組積の両袖型で壁面には漆喰が塗られていた。
9	蛇穴山古墳	〃	〃	39m×43m高さ5mの方墳、寺院建築の影響が考えられる。全面に漆喰が残っている。
10	上野国分寺	群馬町東国分	奈良平安	741年聖武天皇の詔勅により建立された官寺、平将門の乱か源頼朝挙兵の戦火で焼失したものと思われる。近年開発調査により堂塔の様子が明らかになってきた。
11	国分寺中間地域	〃	〃	奈良から平安時代を中心とする大集落跡墨書銘土師器
12	国分寺国分尼寺	〃	〃	僧寺に比べ若干面積は小さく講堂　金堂と共に布目瓦が出土している。
13	閑泉樋遺跡	前橋市元総社町	〃	古墳時代の住居跡　奈良，平安時代の溝、中世の溝
14	王山古墳	〃	〃	前方後円墳後円部が先に築かれた遺跡全長75.6m、FA上に構築
15	寺田遺跡	前橋市元総社町100番地10他5筆に所在する。		

地図上No.	遺　跡　名	所在地	時　期	遺構・遺跡の概要
16	元総社明神遺跡	前橋市 元総社町	古　墳 中　世	古墳時代鬼高期の住居址と溝が検出された。
17	正観寺遺跡	高崎市 小八木町 正観寺町	弥　生 中　世	弥生・古墳・奈良・平安・中世に及ぶ竪穴住居，円墳，溝，井戸等が確認されている。
18	鳥　羽遺跡	前橋市 元総社町	奈　良 江　戸	B軽石の直上に土師質土器一括資料を得る。
19	中　尾遺跡	高崎市 中尾町	古　墳 平　安	古墳時代前中後期の住居、　奈良平安時代の住居３００軒以上、土師器，須恵器灰釉陶器，鉄器等出土
20	大八木遺跡	高崎市 大八木町	縄　文 古　墳	縄文時代住居址・埋甕・古式土師住居跡鬼高期住居址等
21	日　高遺跡	高崎市 日高町	弥　生 中　世	条里制水田が確認された。
22	前箱田遺跡	前橋市 前箱田町	平　安 中　世	耕作状遺構
23	村　前遺跡	〃 箱田町	平　安	浅間B軽石下の水田址と畝状遺構
24	五反田遺跡	〃 〃	〃	浅間B軽石下の水田址
25	生　川遺跡	〃 南　町	古　墳 平　安	古墳時代～平安時代に及ぶ住居址
26	推定東山道		御布呂遺跡での発掘結果金坂氏の所見により地図上に復元。大化２年（６４６）五畿七道を整える桐原健　アズマへの道、アズマからの道	
27	国府推定地	元総社町	第１表に同じ	

第Ⅲ章　調査の方法

第1節　発掘調査の方法と進め方

福祉事務所と市教委の担当者との間で数回にわたって調査の経費、期間、作業の安全等について協議・打ち合せを行い次のとおりとした。

1）発掘調査は保育所建物建設により遺跡の破壊される部分とする。

2）調査は建物の移転及び道路工事進捗にあわせ3段階に分け第1調査区が終了後第2調査区の排土で埋戻し、第2調査区は第3調査区の排土で埋戻し最後に第1調査区の排土で第3調査区を埋戻すことで調査に入った。

以上、調査は残土の1次ストックや、家屋の移転の遅延、道路建設工事との調整などの問題や、元来低湿地であり、掘り下げた調査区は湧水と雨期と雷雨時の出水により、終始水との戦で厳しい作業となった。

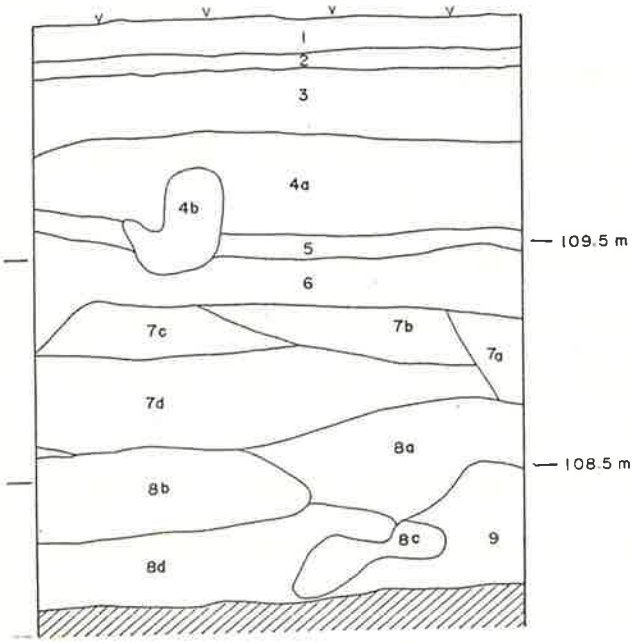
調査は6月4日に着手し、座標　F－4グリット　Y軸－70.878m　X軸42.782m　F－8グリット　Y軸－70.858m　X軸　42.782m　を基準軸とした。

3調査区を網羅できる北西隅を基点とし南北軸をアルファベット文字、東西軸をアラビア数字で表わし、グリット名は交点から南へ4.0m、東へ4.0mの区域を示すこととした。

第2節　地形及び標準土層断面について

地形は総社神社と元総社小学校は一段高い所にあり、その東側を牛池川が南流している。比高差は、およそ2～3mである。牛池川左岸から当遺跡までは低地である。C－10グリットとF－10グリットを結ぶ線上で急勾配に西へ傾斜している事から、この間の地域は低湿地であり、かつては牛池川の遊水池の役割をはたしたものと考えられる。遺構としてはこの遺跡の東端に大型の溝が南北に走っている事が確認された。（第8図）

第４図　標準土層断面図
Ｃ－６グリット付近



1　層　灰褐色土　締まりない耕作土

2　層　オレンジ褐色土　軽石を僅か含み１層より締まりがある。

3　層　灰白褐色土　２層に近い褐色土でＦＡ軽石を含む。

４ａ層　暗褐色土　粘性があり砂を含む

４ｂ層　４ａ層と同様だが砂の量が多い

5　層　青灰褐色土　Ｂ軽石純層

6　層　褐色土　褐色粘質土と砂を５０％含む

７ａ層　黒褐色土　ピート（９０％）砂（１０％）の混土層

７ｂ層　黒褐色土　ピート（５０％）砂（５０％）の混土層

７ｃ層　暗褐色土　暗褐色粘質土（５０％）砂（５０％）の混土層

７ｄ層　暗褐色土　暗褐色粘質土（60％）砂（４０％）の混土層

８ａ層　黒色土　ピート（７０％）と（砂３０％）の混土層

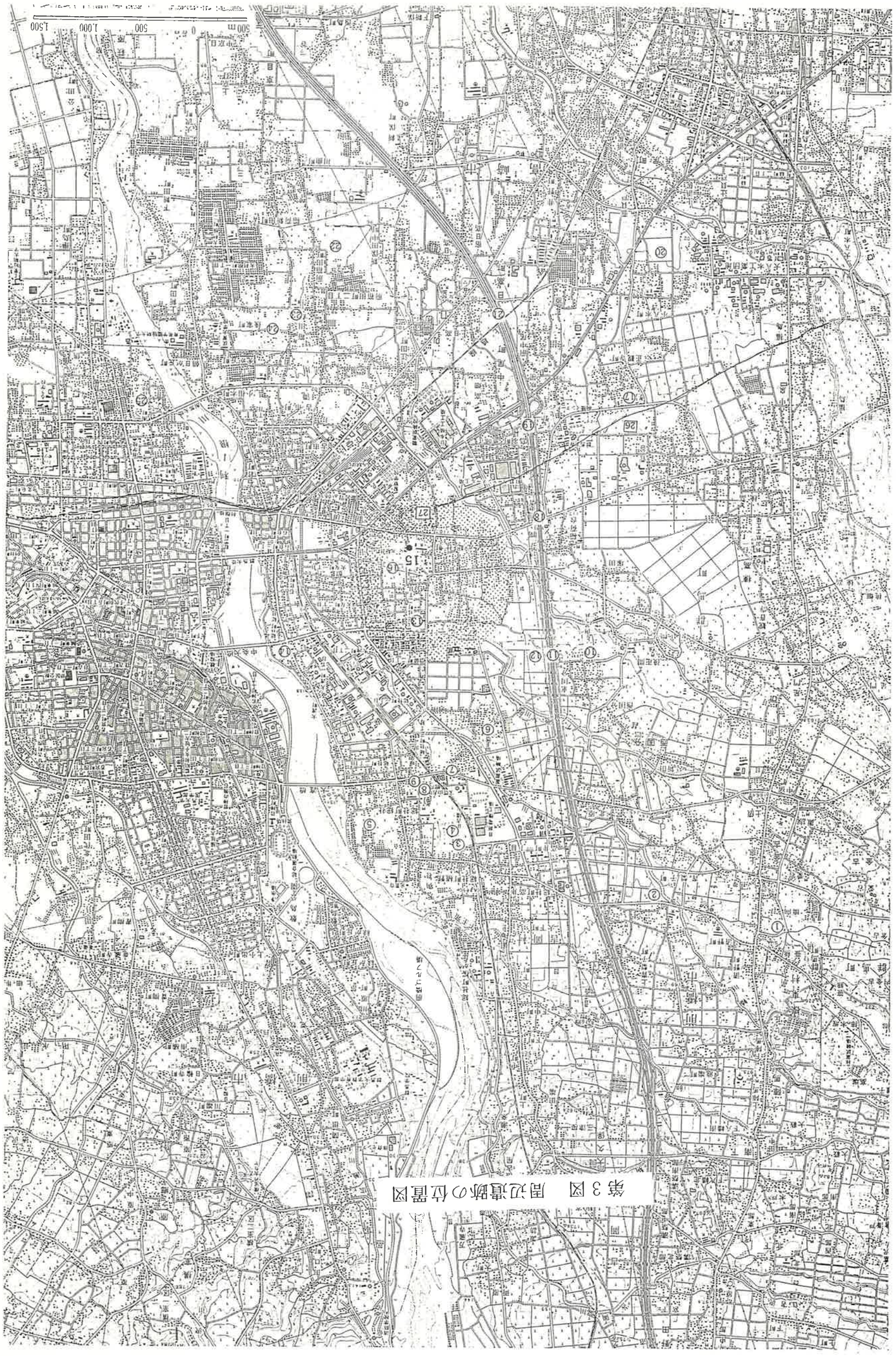
８ｂ層　黒色土　ピート層わずかに軽石（２～３㎜）を含む

８ｃ層　黒色土　ピートのブロック

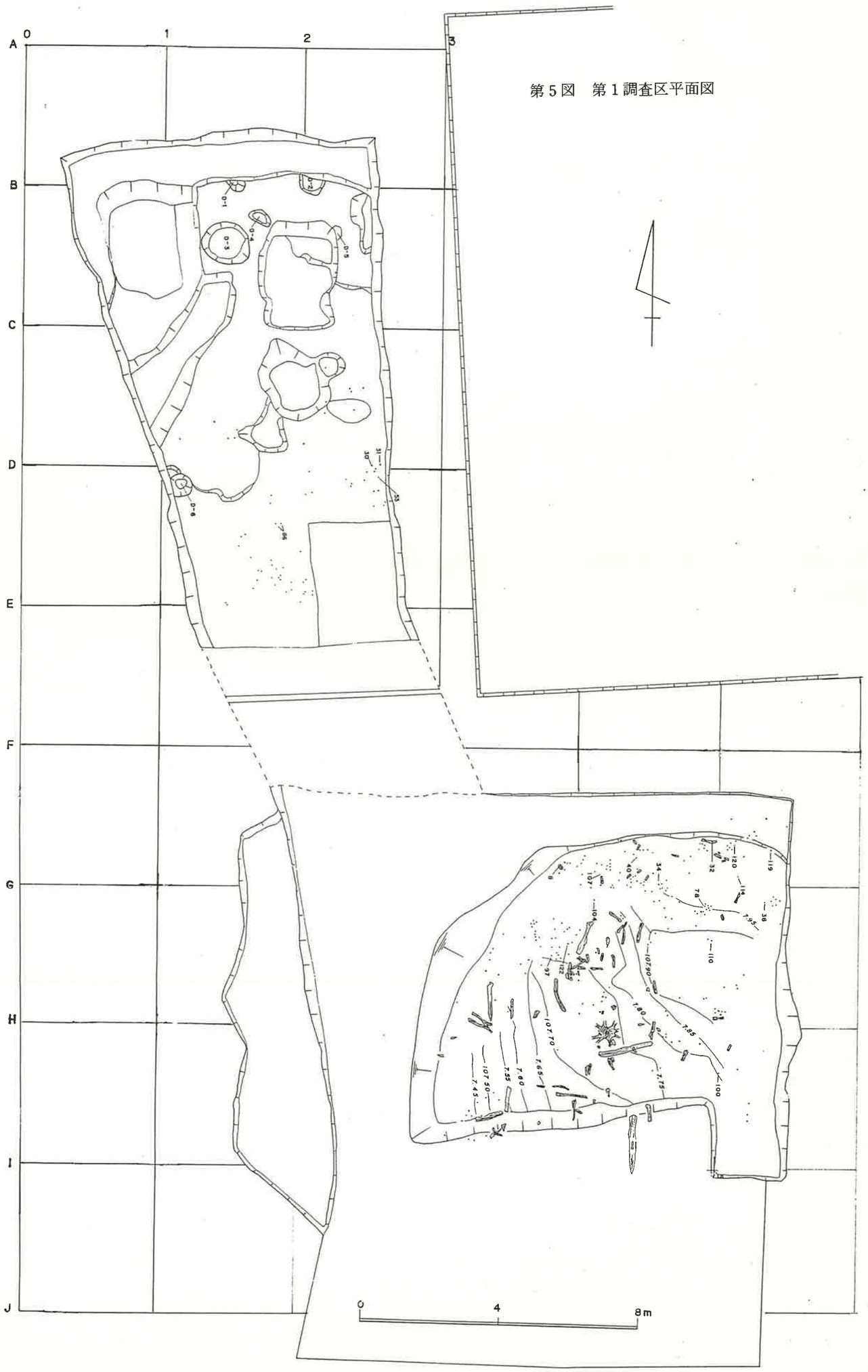
８ｄ層　黒色土　ピート（２０％）と砂（８０％）の混土層

9　層　橙褐色砂礫層

10　層　黄灰白色浅間Ｃ軽石層



第３図　周辺遺跡の位置図



第５図　第１調査区平面図

第Ⅳ章　検出された遺構と遺物

第１節　　第１調査区の遺構と遺物

Ｄ－１グリット～Ｄ－２グリットに炭化物と黒色灰層が集中して出土し付近に平安時代の土器も見られたが遺構としての確証は得られなかった。

Ｆ－２より南の地域ではＧ－５グリットからＨ－４グリットを経て、Ｉ－３方向に流路址が確認された。

それ以前には、浅間のＣ軽石堆積後平安時代のＢ軽石降下迄の期間牛池川の河川の変流により低湿地であった事を物語っている。

第５図に示されているようにＤ－１、Ｄ－２、Ｄ－３、Ｄ－４土坑は砂層の上に褐色粘質土が堆積し、この褐色土を掘り込んで４ケ所の土坑が確認された。

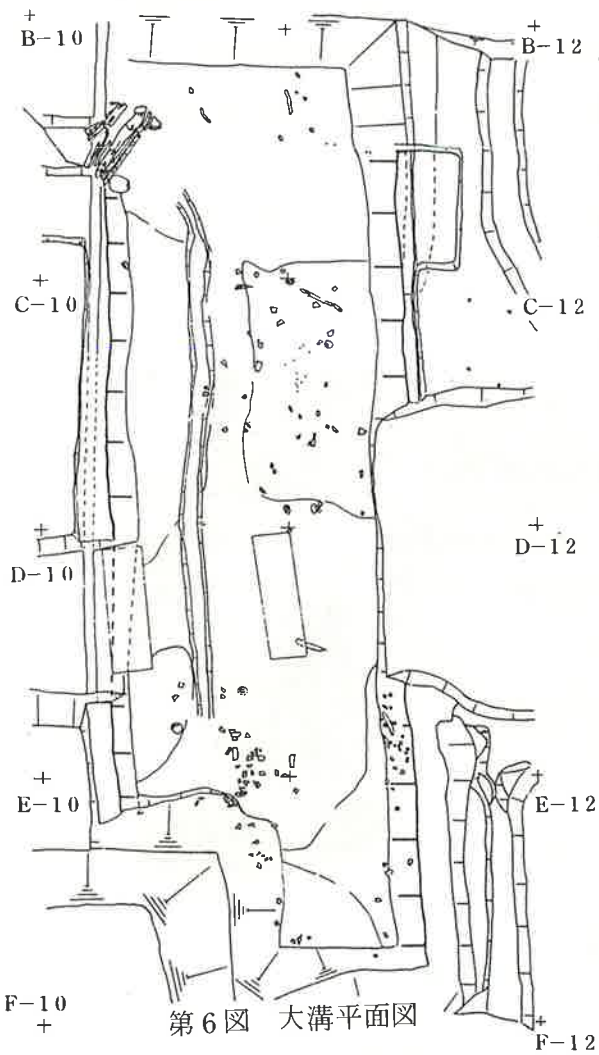
この土坑の用途は不明であるが、この面が生活面として使用可能であった事を示す。

出土遺物としては、朱塗り椀（第４表 No.８）、　小瓶（第４表 No.３０）、青磁の埦（第４表 No.３１）が出土したことは特筆されよう。

第１調査区、Ａ－Ｏ～Ａ－１グリット方向を望む

第２節　　第２調査区の遺構

第２調査区中央部東側よりにＮ－１°－Ｅの方向性をもって南北に走行し調査区域外に延びる大溝が検出された。この溝は（第６図）Ｃ－１０、１１　Ｄ－１０、１１　Ｅ－１０、１１　Ｆ－１０、１１　グリット内に位置する。（区画整理以前使用されていた道路の直下に位置する）土層断面からＦＡ（榛名山二ツ岳、６世紀前半）[1]降下後開削され浅間Ｂ軽石（天仁元年、１１０８年）[2]降下以前迄使用可能であったと考えられる。



第６図　大溝平面図

この溝の北壁付近における上幅４７２㎝下幅３９５㎝深さ１５３㎝中央部で上幅５２９㎝、下幅４０８㎝深さ１４２㎝を測る。断面形を見ると立ち上がりは北壁付近で６７°中央部６４°の逆台形を呈する。溝の底から出土した　布目瓦　須恵器　土師器　等から平安時代中頃まで溝として利用されていたものと思われる。そしてＢ軽石降下後に埋没したものと考えられる。

この大溝北西隅には支水路との合流施設が検出された。覆土は２４層に細分ができた。

第９図 1a～2b 層は耕作土であり７層はＢ軽石の２次堆積層である。

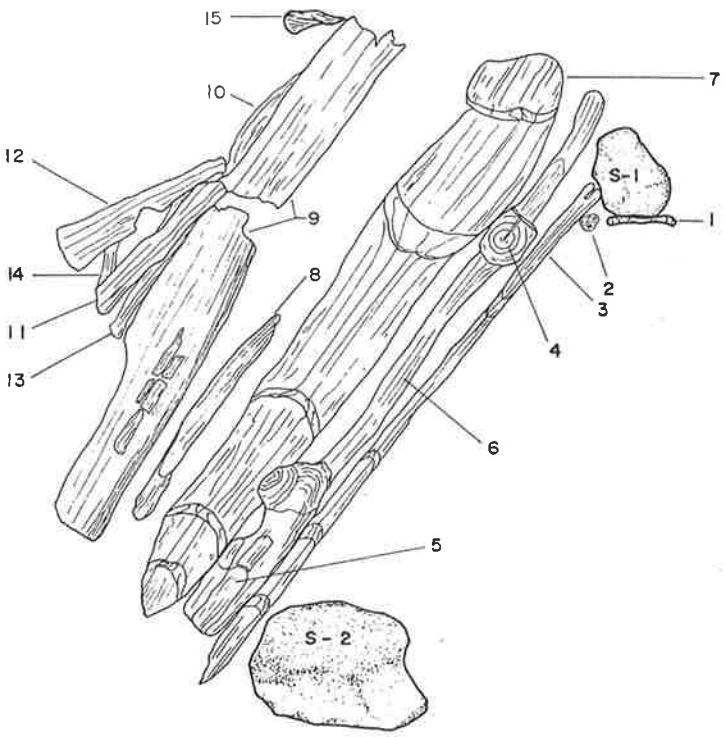
規模は縮小しても依然として流路であった。又同図14層はＦＡ泥流、第１５層はＦＡである事からＦＡ降下後大溝は開削されたことが窺われる。

これは昭和５８年２月～３月にかけて調査された閑泉樋遺跡の１号溝跡の計測値「上幅は6.5～7.0ｍ下幅3.24ｍ深さは２ｍを超すものと思われる」と報告されているものと比較して見ることが出来る。

前述の大溝の構築以前に造られた水口遺構（第７図）には、No.１～１４の板材が敷詰められ、No.３、No.７の板材は、中央部が凹状を呈し特殊な用途を示すものと思われる。２個の石で板を止めている。

No.１は鋤刃の木部でＳ－１を支えるがごとく打込まれていた。

No.１５の木杭は、No.９の板を止めるために打ち込まれている。



註

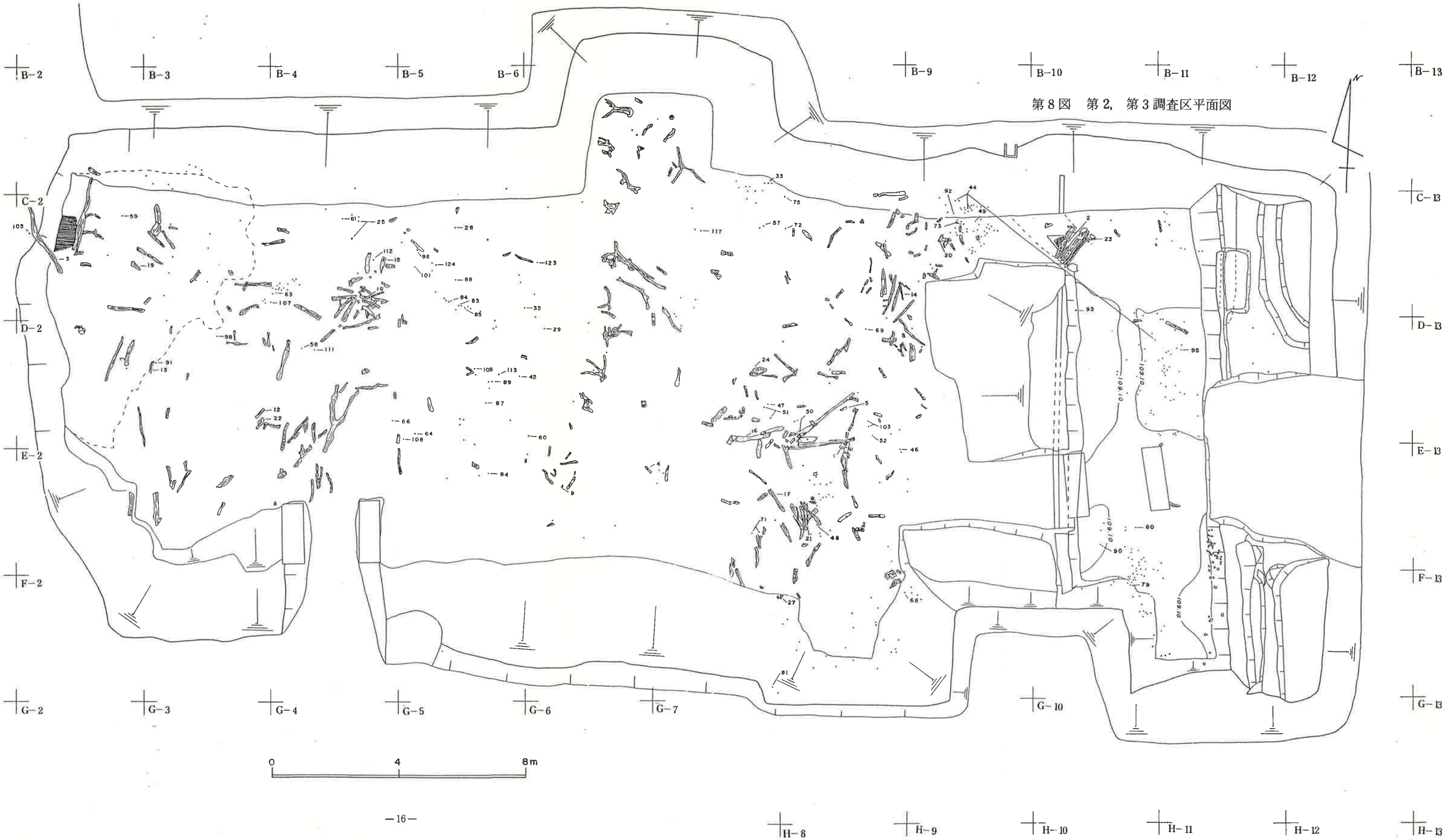
(1) 群馬大学　新井房雄教授の実施調査による。

(2) 石川正之助、井上唯雄、梅沢重昭、松本浩一編「火山と遺跡１」考古学ジャーナル

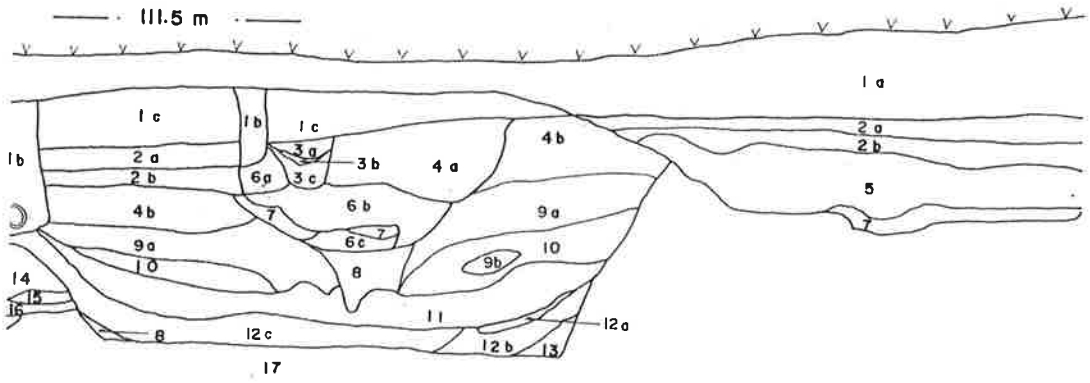
第７図　水口遺構平面図

この大溝の左岸上には小溝があり、流路を東に変えるべく設けた小杭が４本確認された。（第８図　Ｄ－１１グリット）

小杭は直径３～５㎝長さ３～１５㎝の木杭であった。



第8図　第2，第3調査区平面図



第９図　大溝土層断面図

１ａ層　盛土

１ｂ層　砕石を含むカクラン層

１ｃ層　灰白褐色土　粘性が強い

２ａ層　耕作土　水田耕作土

２ｂ層　〃　水田床面　オレンジ褐色土

３ａ層　褐色土層

３ｂ層　白色粘土層

３ｃ層　黒褐色粘質土層

４ａ層　灰白色粘質土を多量に含む褐色土層

４ｂ層　オレンジ褐色に近い灰白褐色土層（軽石を僅か含む）

５　層　炭化物を含む暗褐色土

６ａ層　褐色粘質土層

６ｂ層　ＦＡ軽石を含む褐色土層（５～１０％）

６ｃ層　〃　（１０～２０％）

７　層　Ｂ軽石の２次堆積層

８　層　褐色砂層と黒褐色粘質土の混土層（流路）

９ａ層　ＦＡ軽石を含む黒褐色土層（１０～２０％）

９ｂ層　褐色砂層

１０　層　青褐色砂と粘土の混土層

１１　層　黒褐色粘質土層

１２ａ層　１２ｂ層よりも黒色の粘質土を多量に含む黄褐色砂層

１２ｂ層　黄褐色粘土粒を含む黄褐色砂層

１２ｃ層　黒青灰色粘土層（ＦＡの青灰色を呈するものと黒色粘質土と地山の白色粘土粒を含む）

１３　層　白色粘土を含む黄褐色砂質層　粘性が強い

１４　層　ＦＡ泥流褐色土

１５　層　ＦＡ純層

１６　層　黒色ピート層

１７　層　黄灰白色砂岩層　地山

第3表

大溝出土遺物観察表

出土位置	種類	標高	色調	器形・成形の特徴	遺存・備考
C−10−1a	須恵	110.130	灰白	甕の胴部破片、外面平行叩き目文（にぶい黄橙）内面同心円叩き目文（灰白）	少量
〃 2	須恵	110.235	灰白	白磁の破片，内外面釉が掛かっている。	少量
C−10−1	土師	109.850		図版番号９３による。	
〃 2	須恵 皿	109.225	灰白	体部は浅く口縁部は僅かに外反する。外面回転ナデ，高台は直立して短い。内面口縁部に顕著に灰釉が見られる。	口縁部〜底部少量
〃 3	須恵 蓋	109.165	紫灰	ロクロ整形，外面回転ナデ，内側に「かえり」を持つ。	口縁部〜底部少量
C−11−1a	瓦	110.310	暗紫灰	平瓦の破片	少量
〃 2	瓦	110.035	灰白	平瓦の破片凹面布目痕にヘラ書き文有り。	少量
〃 3	瓦	110.150	灰	平瓦の破片凹面布目、凸面に繊維痕あり。	少量
C−11−1b	須恵	109.310	灰白	甕の胴部外面ヘラナデ炭化物の付着顕著	少量
〃 2	土師	109.300	明褐	埦の体部。外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ	体下部少量
〃 3	須恵	109.295	黒	甕の胴部の破片。	少量
〃 4	須恵	109.285	灰	埦の口縁から体部内外面回転ナデ指文有り。	
〃 5	土師 杯	109.310	橙	外稜を持つ杯の体部破片。	底部少量
〃 6	土師	110.350	にぶい橙	甕の胴部破片。磨耗が顕るしい。	少量
〃 S−1	石	H110.240 L110220	緑灰	緑泥片岩	
D−10−1	須恵	109.245	青灰	埦高台部。底部糸切後高台を貼り付けた痕有り。回転ナデ灰釉。	台部 1/2残
〃 2	須恵	109.265	灰白	高台付埦。内外面回転ナデ，高台は逆台形を呈す	底部 1/4残
〃 3	瓦	109.915	灰白	布目平瓦破片	少量
〃 4	瓦	109.680	灰白	布目平瓦破片。端をヘラナデ部分的に布目をすり消す。	少量
〃 5	瓦	109.645	図版44による。C−9−4,C−9−5,C−9−6,C−9−11,D−10−5		ほゞ完形
〃 6	瓦	109.850	灰白	布目をすり消す。端ヘラナデ，叩き文有り。	少量
〃 7	須恵	109.497	青灰	甕胴下部から底部の一部。外面繊維痕内部指ナデ	胴下部少量
〃 8	須恵埦	109.250	灰	高台付埦の底部破片。回転糸切後高台貼り付け，内外面回転ナデ。底部中央が最も薄い。	底部 1/5残
〃 9	土師 杯	109.290	橙	外稜を持つ杯の体部から口縁部磨耗が顕しく整形方法は不明。（鬼高Ⅱ）	口縁少量

出土位置	種類	標高	色調	器形・成形の特徴	遺存・備考
D−10−10	須恵	109.370	黒	羽釜の口縁部。内外面回転ナデ黒色処理。	口縁少量
〃 11	土師 杯	109.530	にぶい橙	体部は内弯し口縁部は外反する。杯の口縁部	口辺部少量
〃 12	瓦	109.620	明赤灰	焼き締った布目瓦。 凹面の布目の一部を指ですり消す。	少量
〃 13	土師 杯	109.625	にぶい褐	杯の体部から口縁部。外面口唇部に煤あり。内弯しながら立ち上がった体部は口縁部で内傾する。	口辺部少量
〃 14	須恵	109.365	暗赤灰	壺胴部破片。外面ヘラ削り後ナデ，内面ナデ黒色を呈す。	少量
〃 15	土師	109.180	にぶい褐	甕の胴部破片。外面ヘラ削り，内面ナデ	少量
〃 16	須恵	109.220	黒	杯の底部。外面ヘラ削り，内面ナデ	少量
〃 17	須恵	109.230	にぶい黄橙	甕の胴部。外面ヘラ削り後ナデ，内面ヘラ削り	少量
〃 18	須恵	109.230	灰白	甕の胴部。外面ヘラ削り，内面ナデ	少量
〃 19	須恵	109.185	灰白	杯の底部。内外面回転ナデ底部外面は剝げて不明	底部少量
D−11−1b	須恵 碗	109.350	オリーブ黒	高台付碗。底部から体部，底部は糸切後高台を貼付け，内外面黒色処理，内外面回転ナデ，内面底部中央が窪む。	底部 2/3残
〃 3	杯	110.025		図版番号９５による	
〃 4	土師 杯	110.010	明褐	粗い砂粒を多量に含む，回転糸切痕，内外面回転ナデ体部は内弯しながら立ち上がり，口縁部は直線的に外反する。	1/2残
〃 5	須恵 甕	109.280	灰	外面格子状叩き目痕刷り消し。	少量
〃 6	須恵 杯	109.275	灰白	底部は回転糸切り痕明瞭。薄手，内外面回転ナデ中央部が窪み最も薄い。	体下部底部 1/3 残
〃 7	須恵	109.290	灰白	杯蓋の破片。外面口辺に黒色処理が見られる。内外面回転ナデ	少量
〃 8	須恵	109.290	灰白	杯の口縁部。外面指押さえ，内面は黒色処理が見られる。	口縁部少量
〃 9	瓦	109.315	外 暗赤灰 内 暗灰	凸面に格子目に叩き目文を有する，凹面は布目をヘラによりスリ消す。	少量
〃 11	須恵	110.070	外 黒 内 暗灰	甕の胴部。外面は炭火物の付着により黒色を呈する。	少量
〃 12	土師 杯	110.015	灰黄褐	体部から口縁部の一部。内外面回転ナデ，体部は内弯しながら口縁部に至る	口縁少量
〃 13	須恵	110.135	外 黒	内灰白 11と接合	少量
〃 14	須恵	109.290	褐灰	甕の胴部。外面ヘラ削り，内面ナデ	少量
〃 15	須恵 甕	109.260	黒褐	頸部から胴部「く」の字状を呈す。輪積痕を残す内外面ヘラナデ	口，胴上部 1/4
〃 16	土師 杯	109.300	にぶい黄橙	底部を厚く残し，粗い糸による回転糸切痕。内外面回転ナデ	底部 1/5
〃 17	土師 杯	109.320	にぶい褐	口縁部から体部の破片で磨滅が顕しく整形方法は不明。	口縁少量

出土位置	種類	標高	色調	器形・成形の特徴	遺存・備考
D−11−18b	須恵 椀	109.310	灰白	底部の一部分高台の貼り付け部分が剝げる。内外面回転ナデ	底部 1/4
〃 19	須恵 杯	109.280	灰	体部破片。内外面回転ナデ	少量
〃 20	土師	109.225	外にぶい褐 内 褐灰	杯の体部か，磨耗が顕しく不明。	少量
〃 21	須恵	109.310	外 黒褐 内 灰白	甕の胴部の破片。外面黒色処理。横ナデ	少量
〃 22	土師	109.215	にぶい赤褐	壷型土器の頸部。外面ヘラ削り，内面ナデが見られる。	口縁 少量
〃 23	土師	109.215	にぶい橙	杯の破片。磨耗が顕しく不明。	少量
〃 24	須恵	109.260	暗青灰	杯の体部。内外面回転ナデ	少量
〃 26	土師 杯	109.285	明赤褐	杯の口縁部。体部の厚みが口縁部で薄くなり内傾する。	口縁 少量
〃 27	土師 杯	109.290	赤褐	杯の口縁部。磨耗が顕しい。	口縁 少量
〃 28	須恵 杯	109.300	灰	杯の口縁部。内外面回転ナデ，一部灰釉あり	口縁 少量
〃 31	土師 杯	109.255	にぶい褐	杯口縁部。体部は 内彎し口縁部で直立気味に内傾する。	口縁 少量
〃 32	須恵	109.260	暗赤灰	甕の胴部。内外面回転ナデ	少量
〃 33	土師 杯	109.290	にぶい褐	杯の口縁部。内外面回転ナデ	口縁 少量
〃 34	土師 杯	109.250	にぶい赤褐	杯の体部から底部。底部外面には煤し痕有り。内面ヘラナデ後ヘラ研磨が見られる。	体下部 1/5
〃 35	瓦	110.220	灰	平瓦 凹面布目を帯状にヘラにて刷り消す。	少量
E−10−1	須恵 皿	109.600		図版番号８０による。	完形
〃 2	土師 椀	109.660		図版番号９０による。	台部一部欠
〃 3	土師 甕	109.600	灰白	甕の胴部の破片。	甕 少量
〃 4	土師 杯	109.615	明赤褐	底部から体部の一部。外面ヘラ削り内面回転ナデ	少量
〃 5	瓦	109.345	青灰	平瓦の一部。 布目痕有り。	
〃 6	瓦	109.300	青灰	平瓦の一部。	
〃 7	羽釜	109.610	淡赤橙	羽釜の鍔の一部。	
〃 8	蓋	109.610	灰	ロクロ整形。外面灰釉，黒色斑点の発泡有り。内面回転ナデ，口唇部は直に折れる。	少量
〃 9	須恵 甕	109.610	外 褐灰 内 灰白	羽釜の胴部上位の破片。外面炭化物の付着が目立つ。内面腐食が目立つ。	胴部 少量
〃 10	須恵 甕	109.600	同上	上記（Ｅ−10−９）と接合	
〃 11	羽釜	109.285	外 灰 内 暗灰	9,10の鍔の部分	口縁

出土位置	種類	標高	色調	器形・成形の特徴	遺存・備考
E-10-12b	蓋	109.280	外 灰白 内 釉	ロクロ整形。内側に灰釉有り。口唇部がくびれ「かえり」の貼り付け。	少量
〃 13	須恵 杯	109.605	灰白	口縁部の破片。	口縁 少量
〃 14	土師 杯	109.605	にぶい黄橙	粗雑な整形で口縁部が一定でない。外面回転ナデ内面回転ナデの沈線が顕著に見られる。	口辺部 1/3
〃 15	土師	109.605	にぶい黄橙	高台付椀の底部。 外面回転糸切痕有り。内面は腐食され不明。	底 少量
〃 16	土師	109.600	にぶい黄橙	（E－10－14）と接合。	
〃 17	須恵	109.635	灰黄	羽釜の胴部。内側の腐食が目立つ，9,10,11，と同一個体と思われる。	
〃 18	須恵	109.605	灰白	杯の体部の破片。内外面回転ナデ，内面に黒色処理が見られる。	
〃 19	須恵	109.595	灰白	高台付椀の底部から， 体部回転糸切り後高台貼り付け，内面には煤の付着が見られる。	1/3 残
F-10-1b	土師	109.890	赤褐	甕の胴部。外面ヘラ削り，内面粗いナデ。	胴部 少量
〃 2	土師	109.800	外 灰白 内 灰	杯の底部。磨耗が顕しく整形については不明	底部 少量
〃 3	須恵 蓋	109.835	灰白	杯，蓋。内外面回転ナデ，灰釉	1/4 残
〃 6	瓦	109.815	赤褐	布目の一部にヘラで刷り消しが見られ破損顕しい	
〃 7	須恵	109.810	黄灰	高台付椀のてい底部から体部。内外面ナデ，高台は貼り付け部より剥離。	体部 1/6 残
〃 8	瓦	109.845	褐灰	凸面のみ剥離せるもの，ヘラ削り痕が見られる。	少量
〃 9	土師 甕	109.835	外褐，内にぶい黄橙	甕の底部。厚さ1.8cm砂粒を多量に含む，外面ヘラ削り，内面ナデ。	底部 1/3 残
〃 10	須恵	109.605	灰黄	高台付椀、 底部から体部高台部は剥離，内外面回転ナデ。	口辺部 1/5
〃 11	瓦	109.805	外 明赤灰 内 灰白	凸面ヘラ削り，凹面布目，布の繋ぎ目が見られる	少量
〃 12	須恵	109.660	暗灰	大形甕の胴部。内外面ナデ。	少量
〃 13	須恵	109.835	灰白	高台付椀， 内外面回転ナデ，糸切り後長い高台を貼り付け良くナデて糸切り痕を消す。内面灰釉刷け塗り，中央部が最も薄い。	体下部～台部 1/2
〃 14	須恵	109.635	灰白	高台付椀。 ヘラ切り後太い高台貼り付け，内外面粗いナデ，底部中央盛り上がる。	台部 少量 底部 1/2
〃 15	瓦	109.780	灰白	凸面と端部をヘラナデ，凹面布目を刷状の物で斜めにすり消す。	少量
〃 16	土師	109.770	外にぶい橙 内暗褐灰	甕の胴下部。内外面ナデ	胴部 少量
〃 17	土師	109.895	赤褐	杯体部破片。朱が塗られている。	少量

出土位置	種類	標高	色調	器形・成形の特徴	遺存・備考
F−10−18b	土師 杯	109.850	にぶい赤褐	杯体部からロ縁部。内彎して立ち上がる体部は口唇部で僅か内傾する。	ロ辺部少量
〃 19	須恵	109.840	外 灰 内 灰白	高台付埦の底部破片。 内外面図転ナデ煤痕。	底部 少量
〃 20	土師	109.845	外にぶい赤褐 内褐灰	埦の体部からロ縁部。体部は内彎して立ち上がり口縁部は「く」字状に外反する，内面黒色処理。	ロ縁 少量
〃 21	土師	109.780	明赤褐	杯の体部小破片。	少量
〃 22	須恵	109.605	灰白	高台付埦の底部と高台部。内外面回転ナデ，施釉のタレが底部に及んでいる。	台部ほぼ完
〃 23	須恵	109.595	浅黄 橙	高台付埦。 体部及び高台部，内外面回転ナデ，内彎した体部はロ縁部で外反する。	体・台 1/4
〃 24	土師 埦	109.640	外にぶい褐 内 黒	図版番号79による。	体下部・台部 完
25	土師 甕	109.620	にぶい赤褐	甕の頸部からロ縁部。ロ縁部は直線的に外傾し頸部は「コ」字状を呈す，胴部はヘラ削り，内面とロ縁部はナデ。	ロ縁 1/4
〃 26	土師	109.500	外 褐灰 内 灰白	甕の胴部。最上位で外面は煤で黒色になっている。指ナデ痕を明瞭に残す。	少量
〃 27	須恵	109.620	灰白	壷の胴部。外面は平行叩き目文をスリ消し，内面は同心円叩き目文を僅かスリ消している。	少量
〃 28	須恵	109.630	灰白	大形甕の外面は格子目叩き文，内面は同心円叩き目文が施文され，叩き文の凸面をナデている。	少量
F−11−1	土師	109.860	外にぶい赤褐 内明赤褐	ロ径の大きな壷のロ縁部。頸部は鋭く「く」字状に屈曲し大きく外反する。ロ縁部は外側に稜を作って小さく直立する。成整形は丁寧で横ナデが施されている。上滝遺跡，2群土器の5類に該当するものと思われる。	ロ縁 1/6
〃 2	土師	109.805	橙	甕の頸部。「コ」字状を呈す小破片。	少量
〃 3	須恵	109.815	灰白	外面ナデ，内面には同心円叩き文有り。	少量

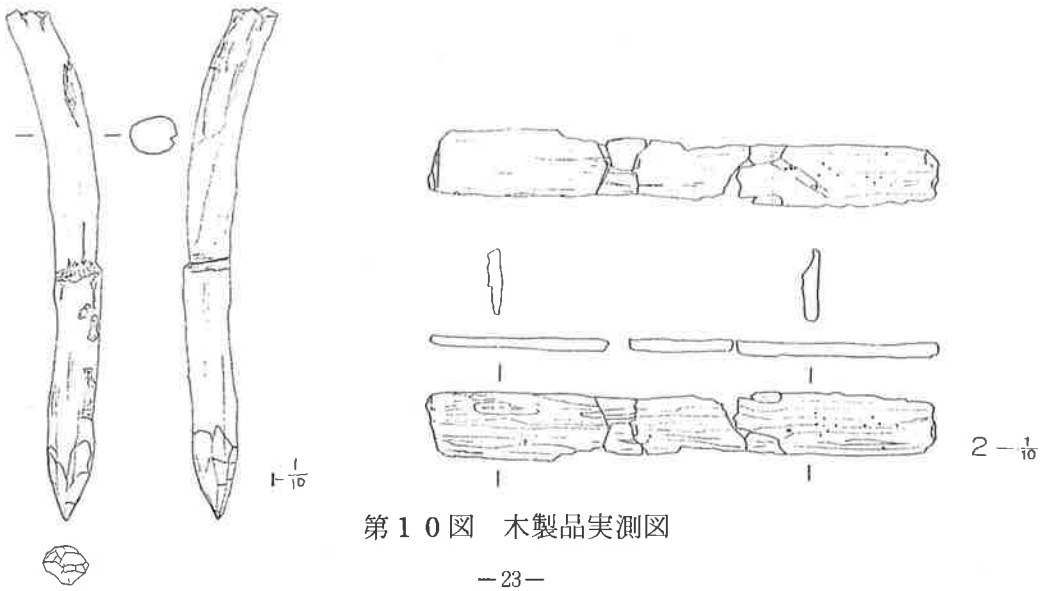
第３節　　第３調査区の遺構

この地域では、遺構は検出されなかった。Ｂ－６，７　Ｃ－６，７　Ｄ－６，７　Ｅ－６，７　グリットに及ぶ河川の跡が確認された。この右岸には柳１０株が検出され、柳の株列は第１調査区のＨ－４グリットでも確認されている。

（第５図　第８図参照）

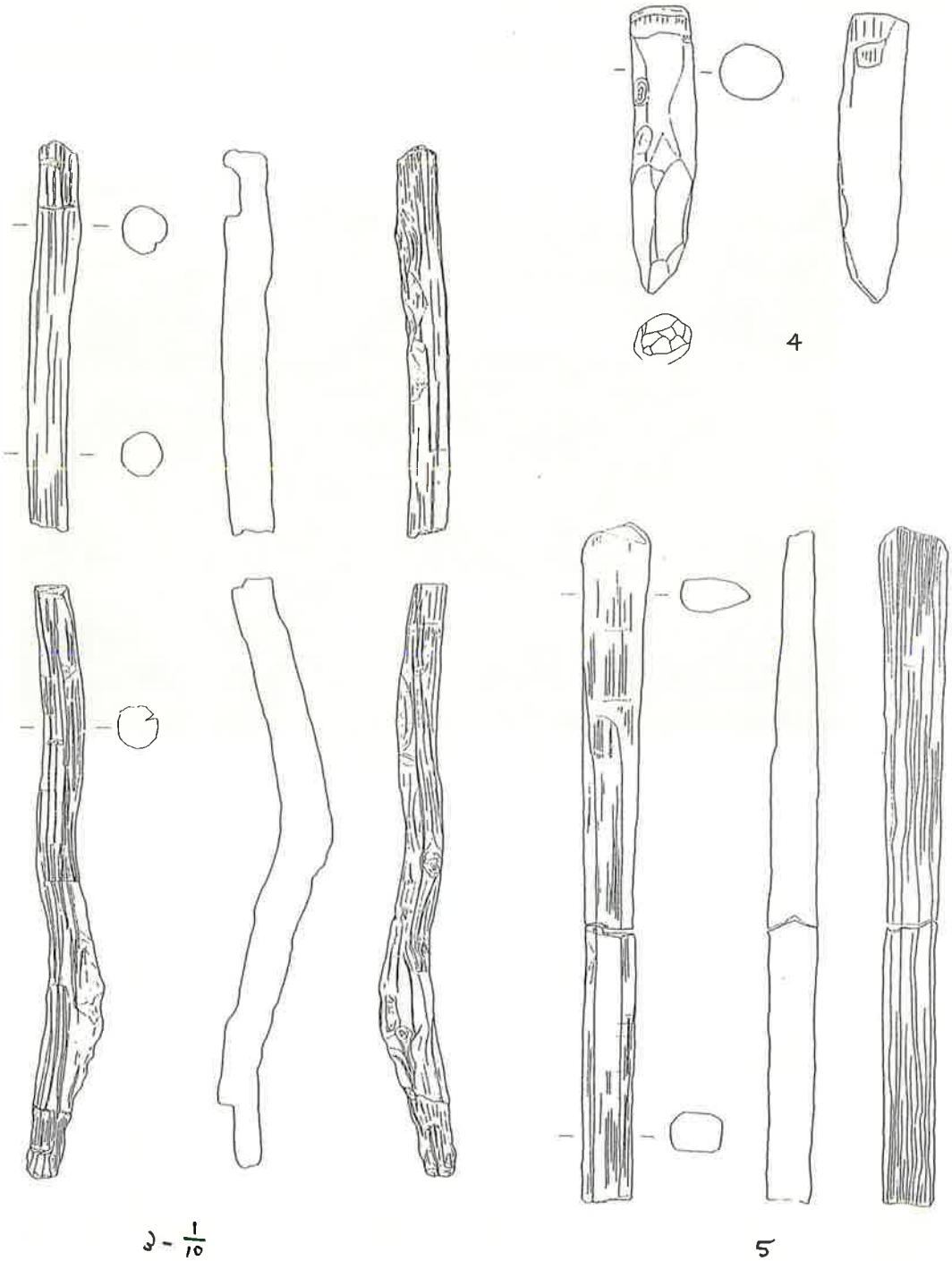
図版２

第３調査区作業風景

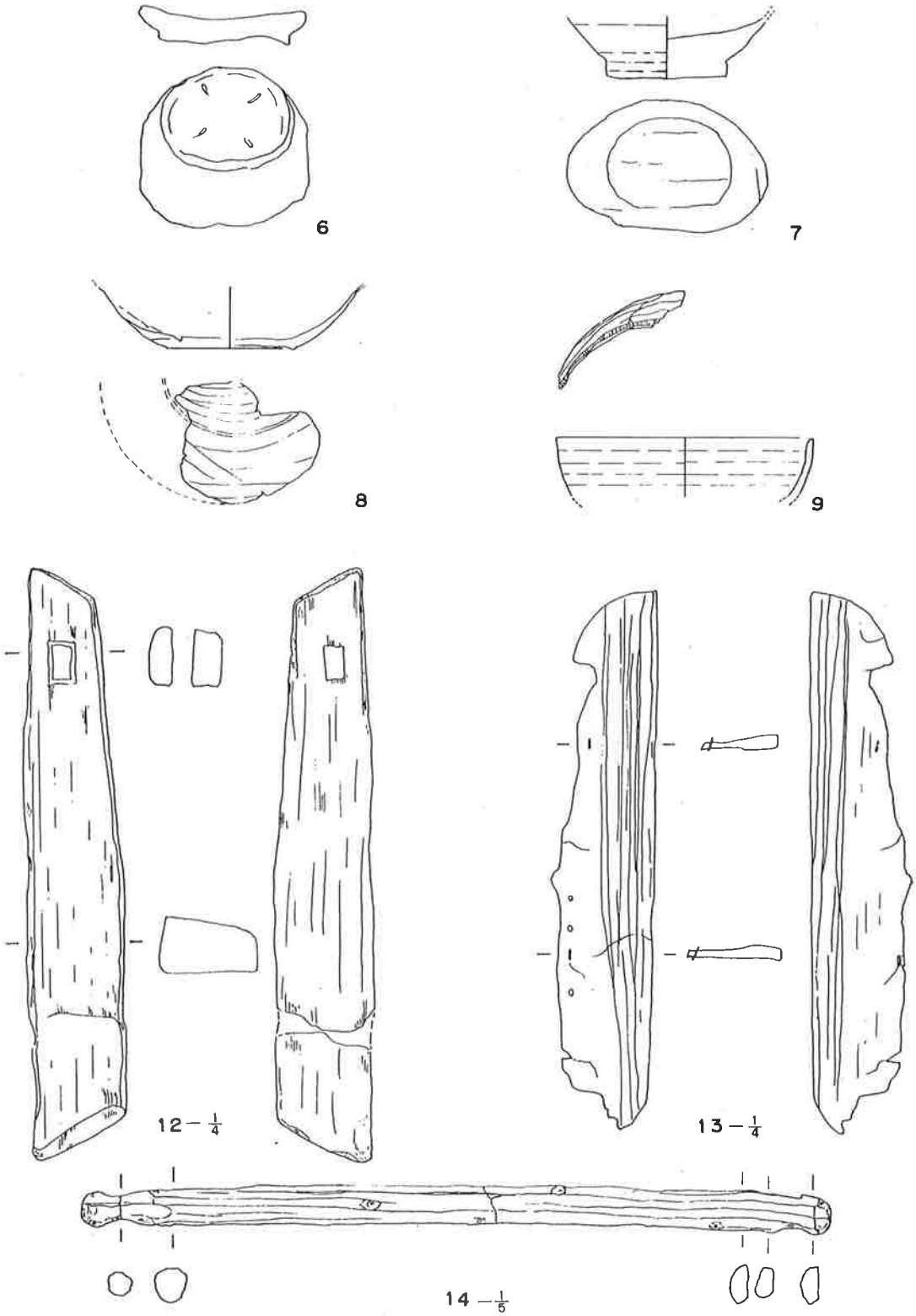


第１０図　木製品実測図

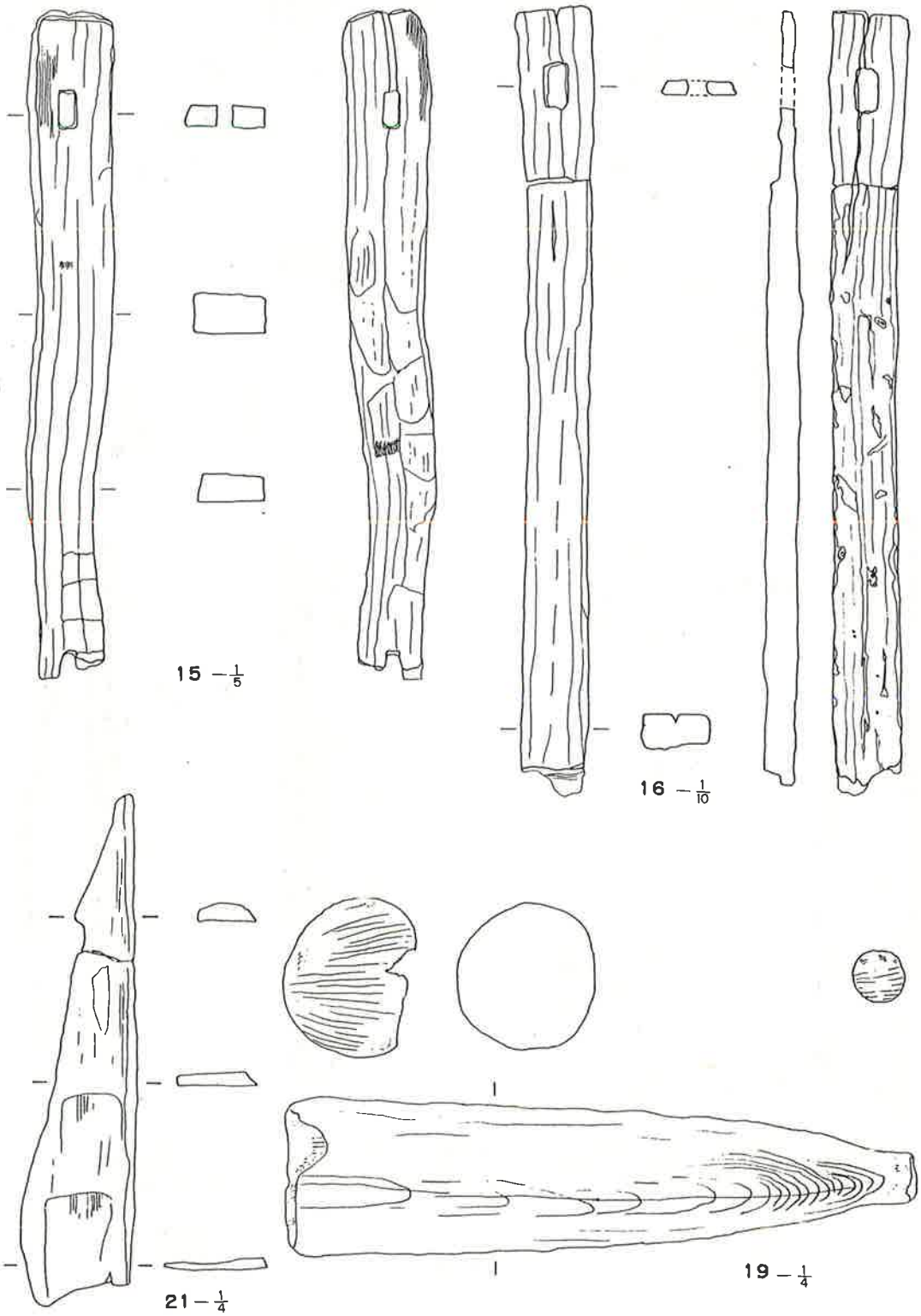
第１１図　木製品実測図



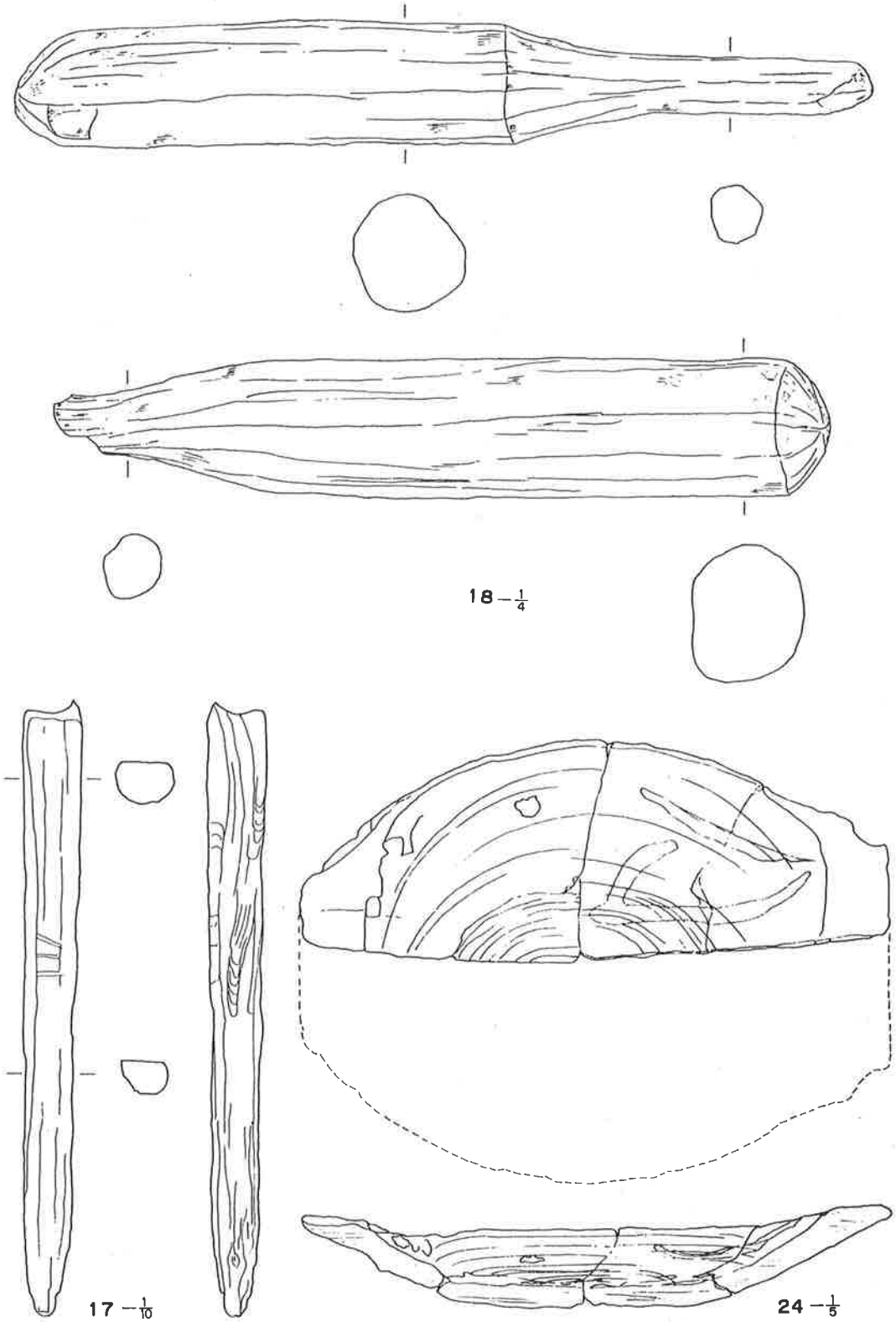
第１２図　椀と木製品実測図



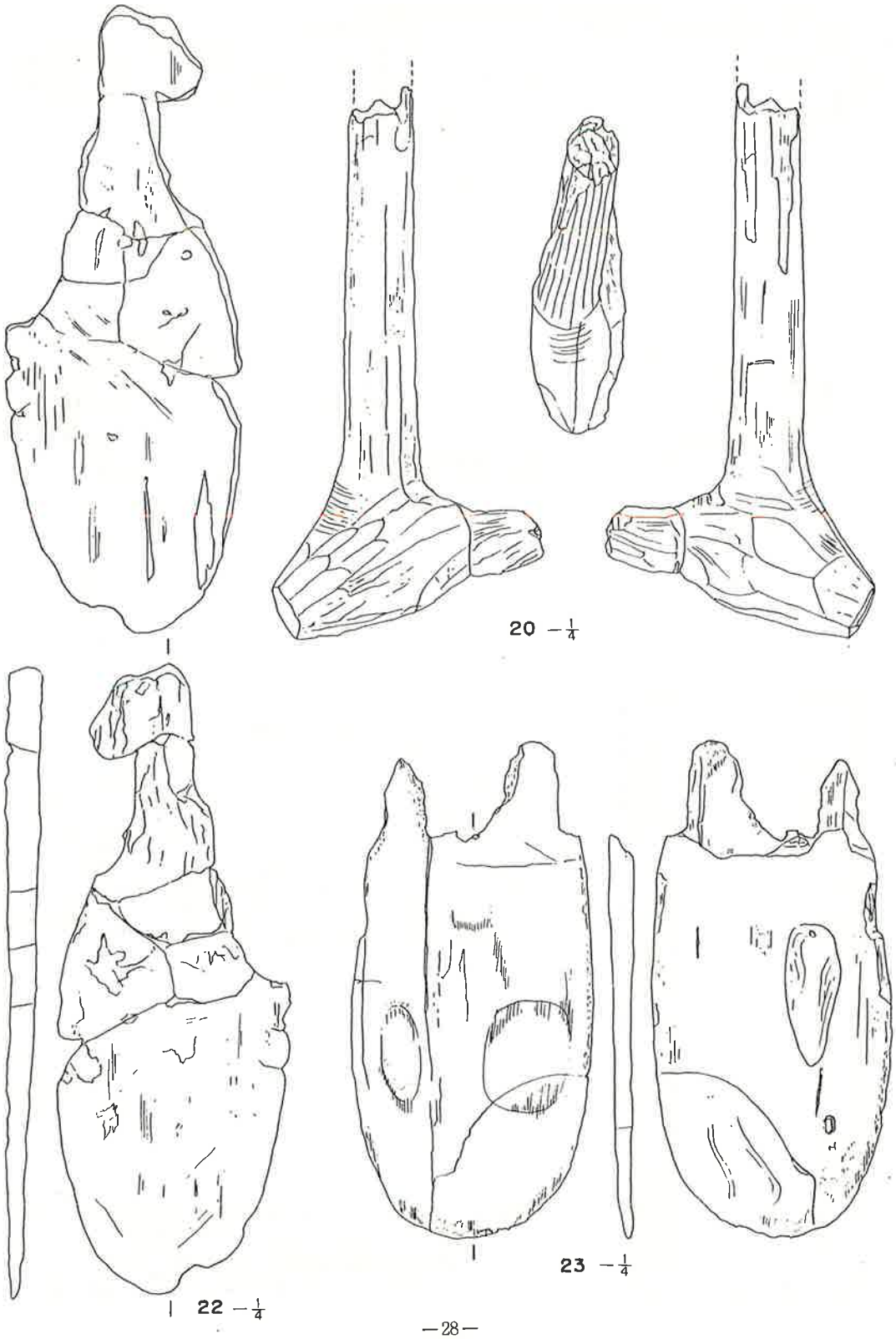
第１３図　木製品実測図



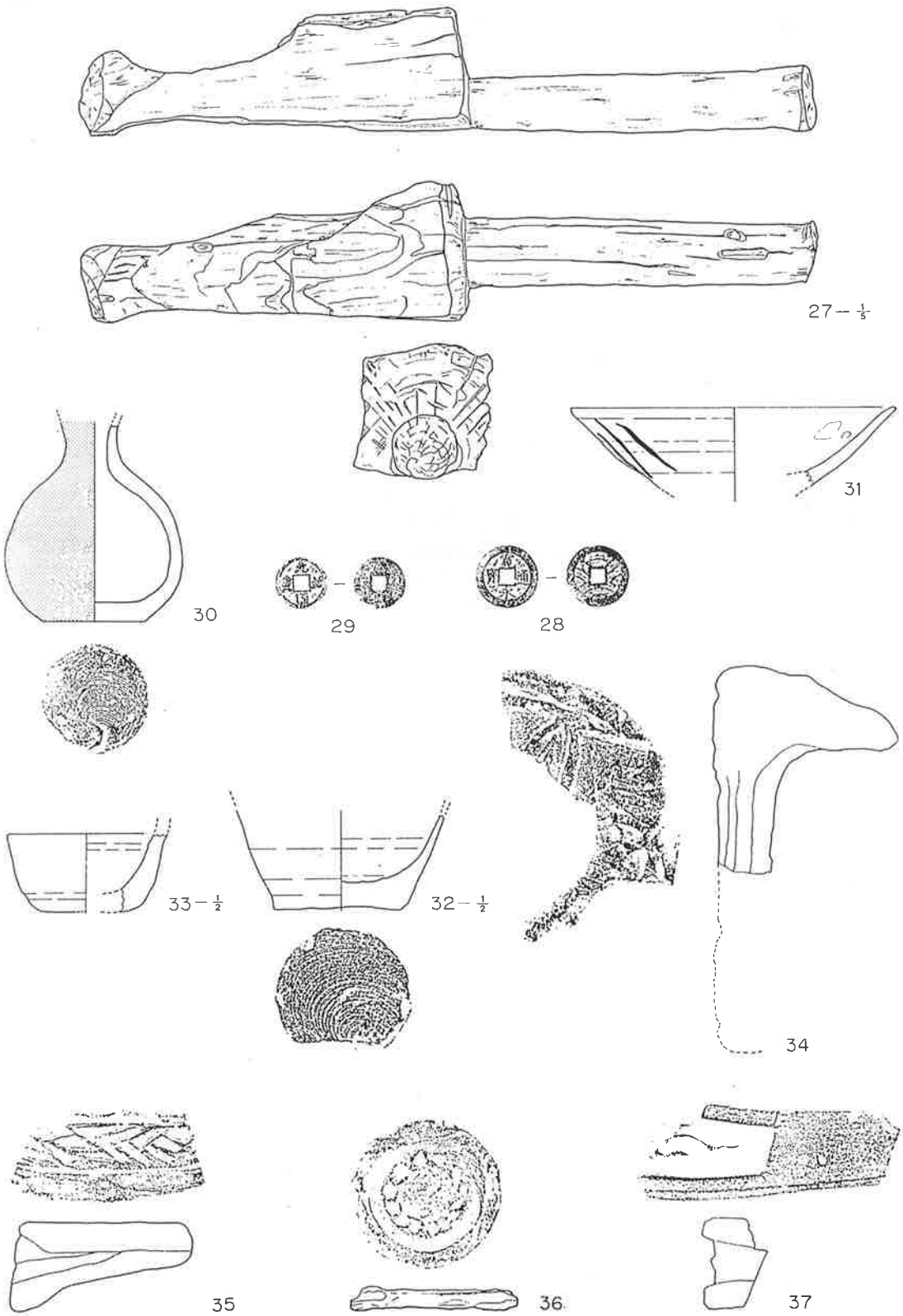
第１４図　木製品実測図



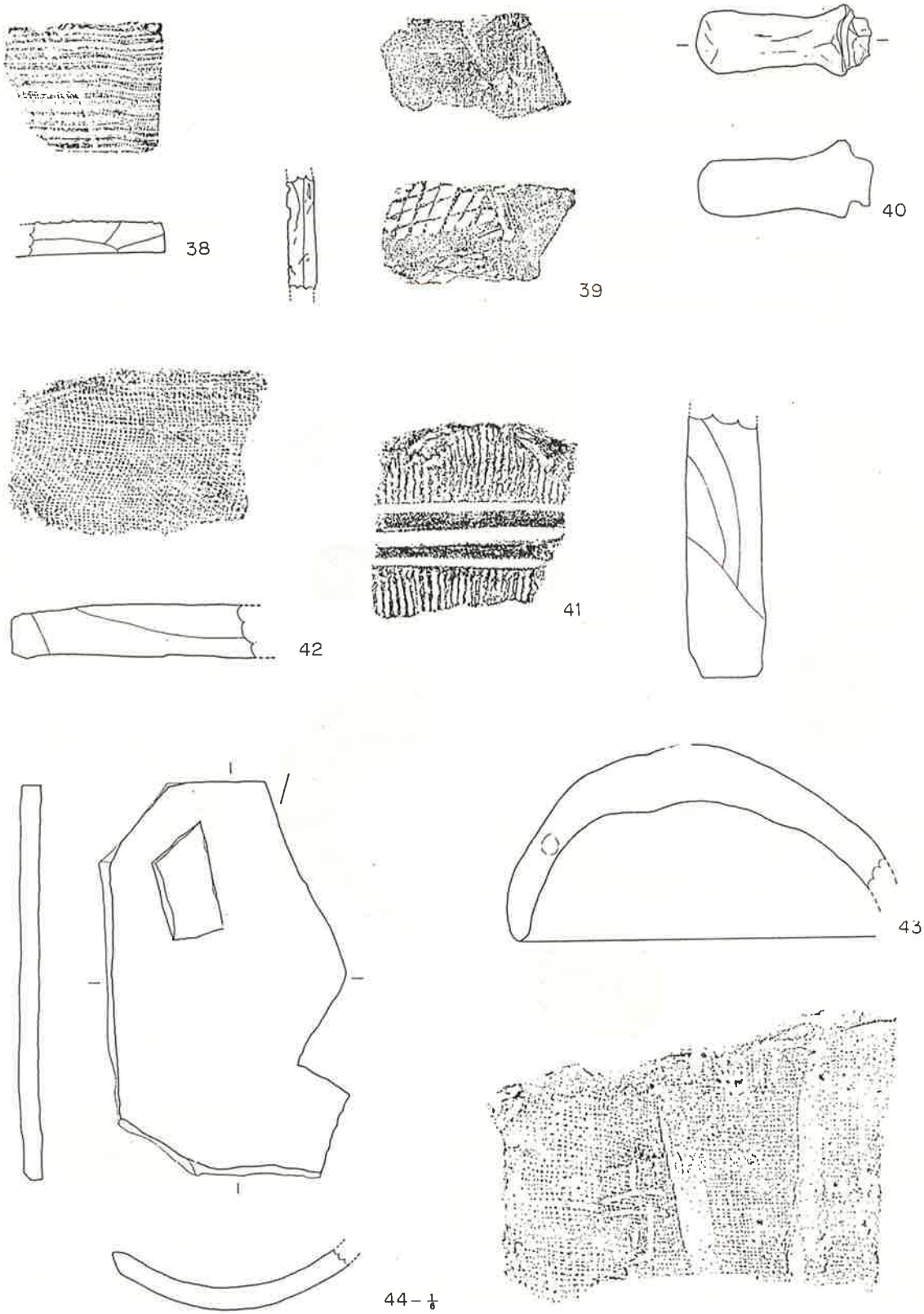
第１５図　木製品実測図



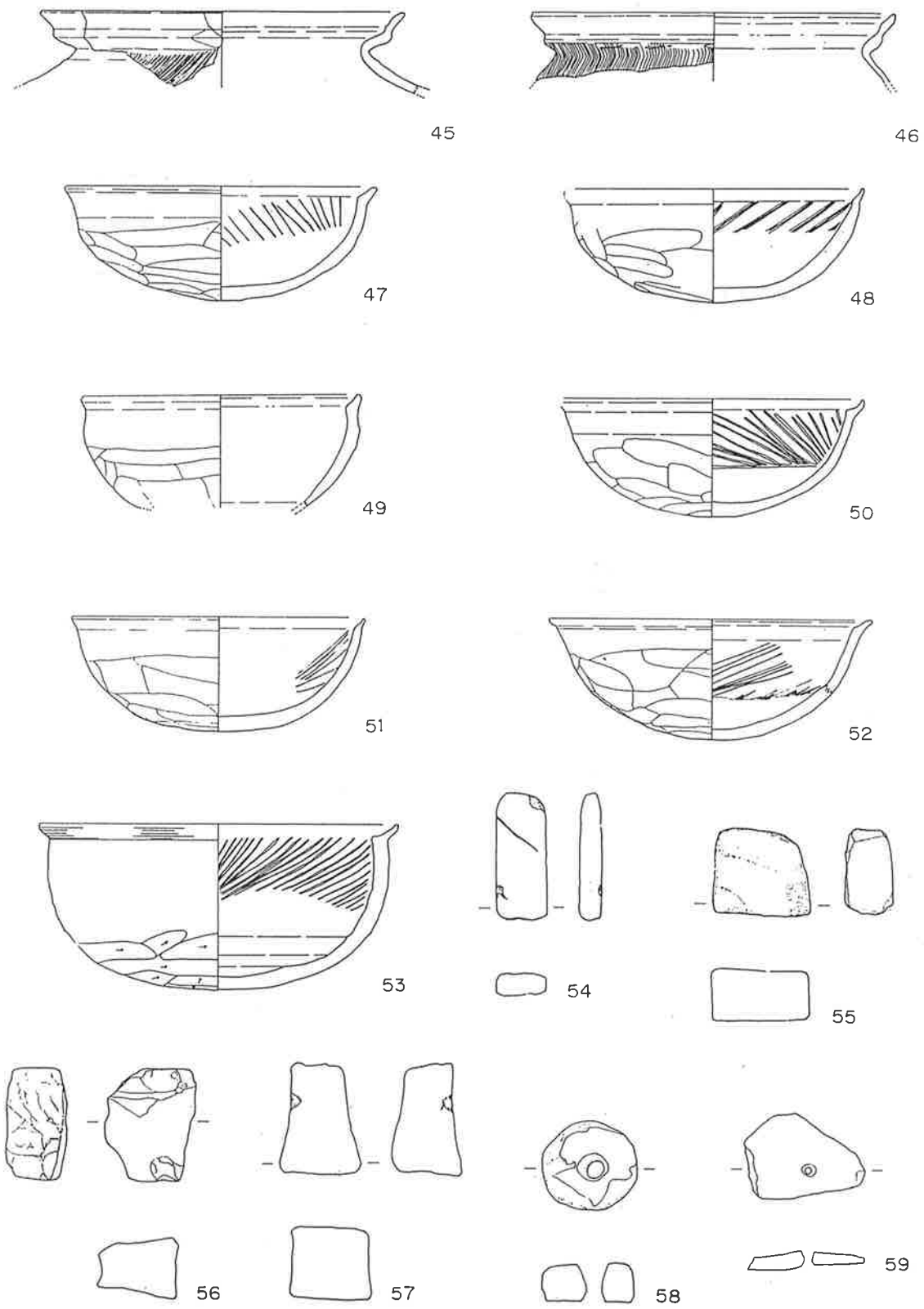
第１６図　出土銭拓本・木製品・小型土器・瓦実測図



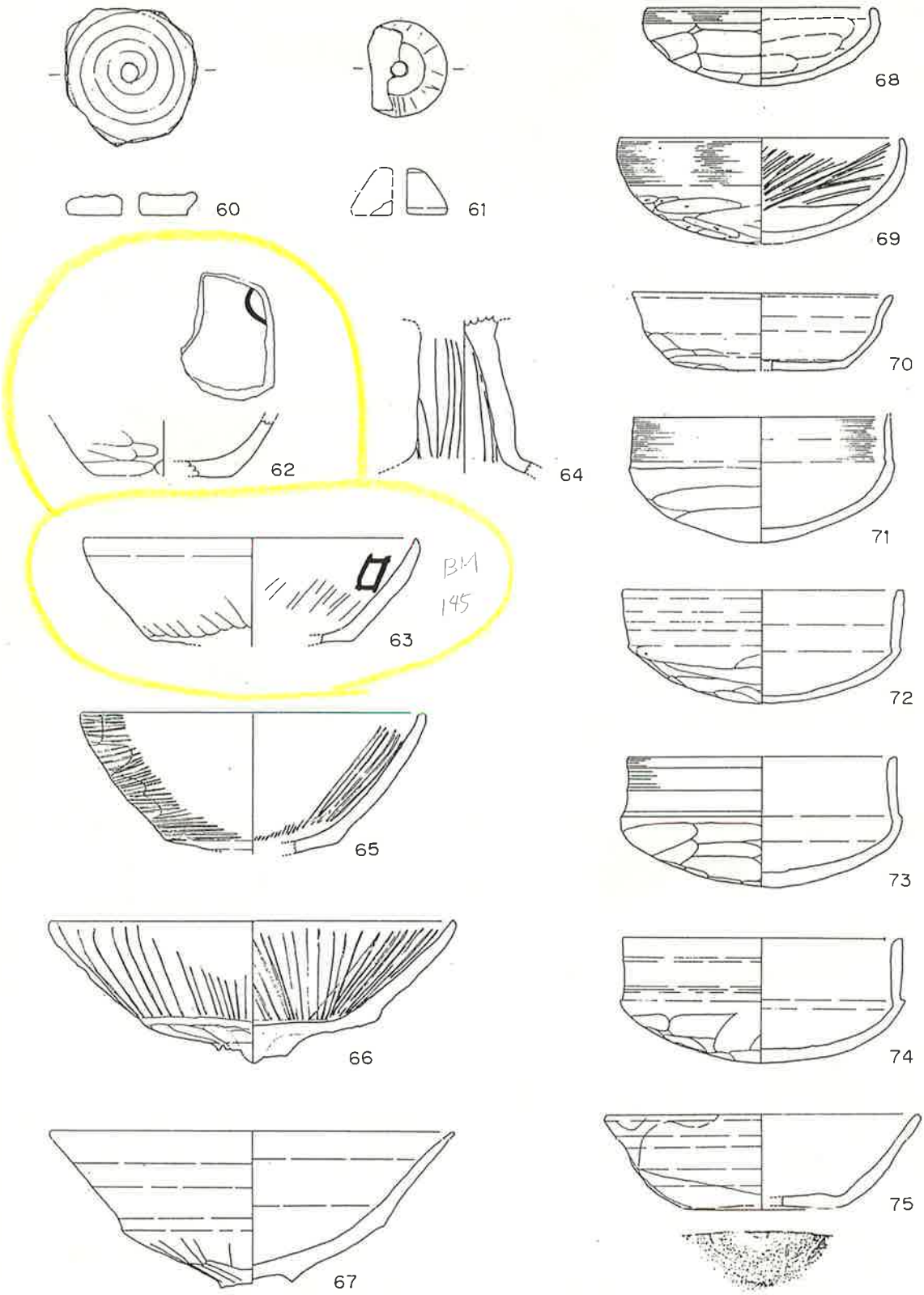
第１７図　特殊遺物・瓦実測図



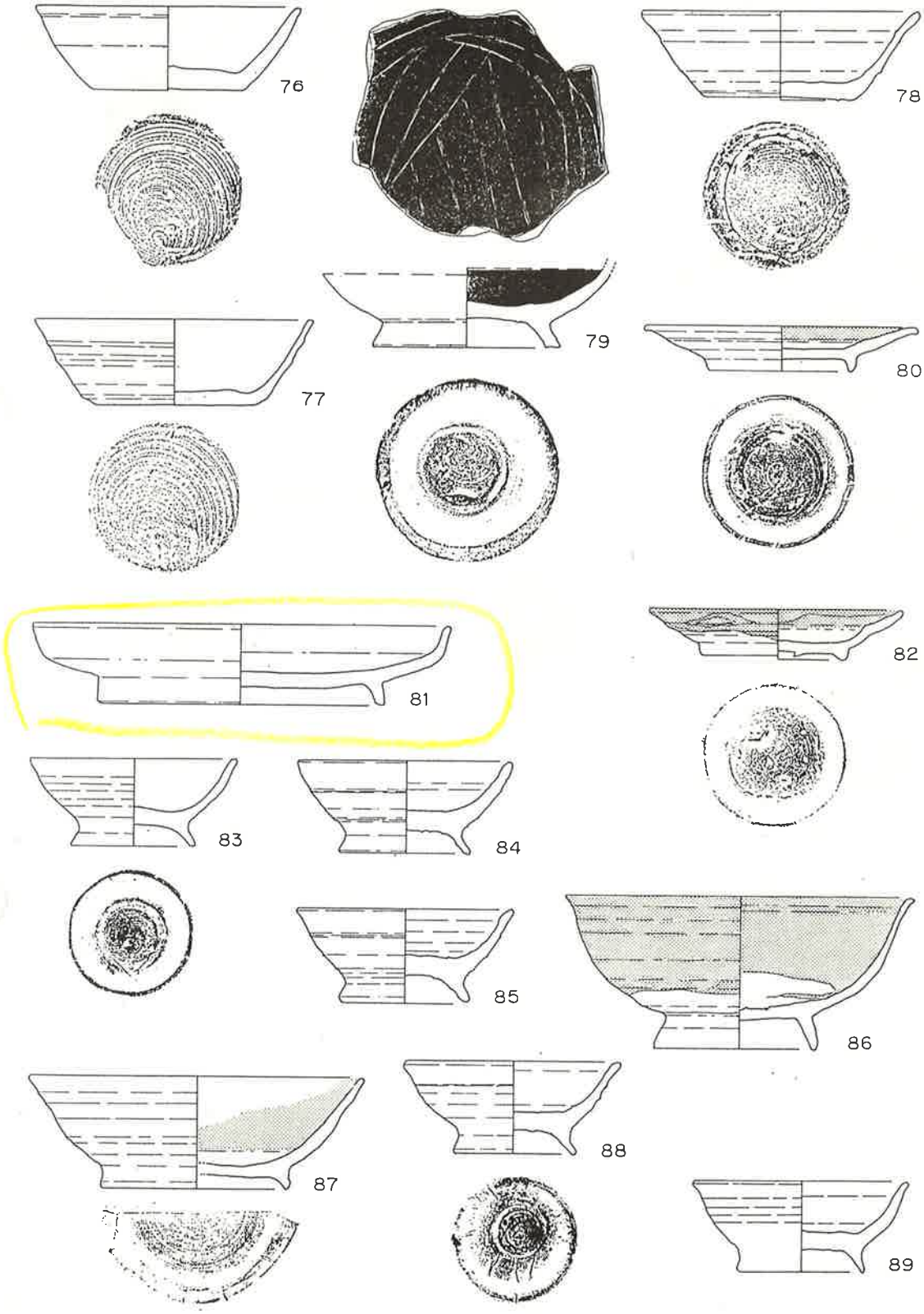
第１８図　甕・杯・砥石実測図



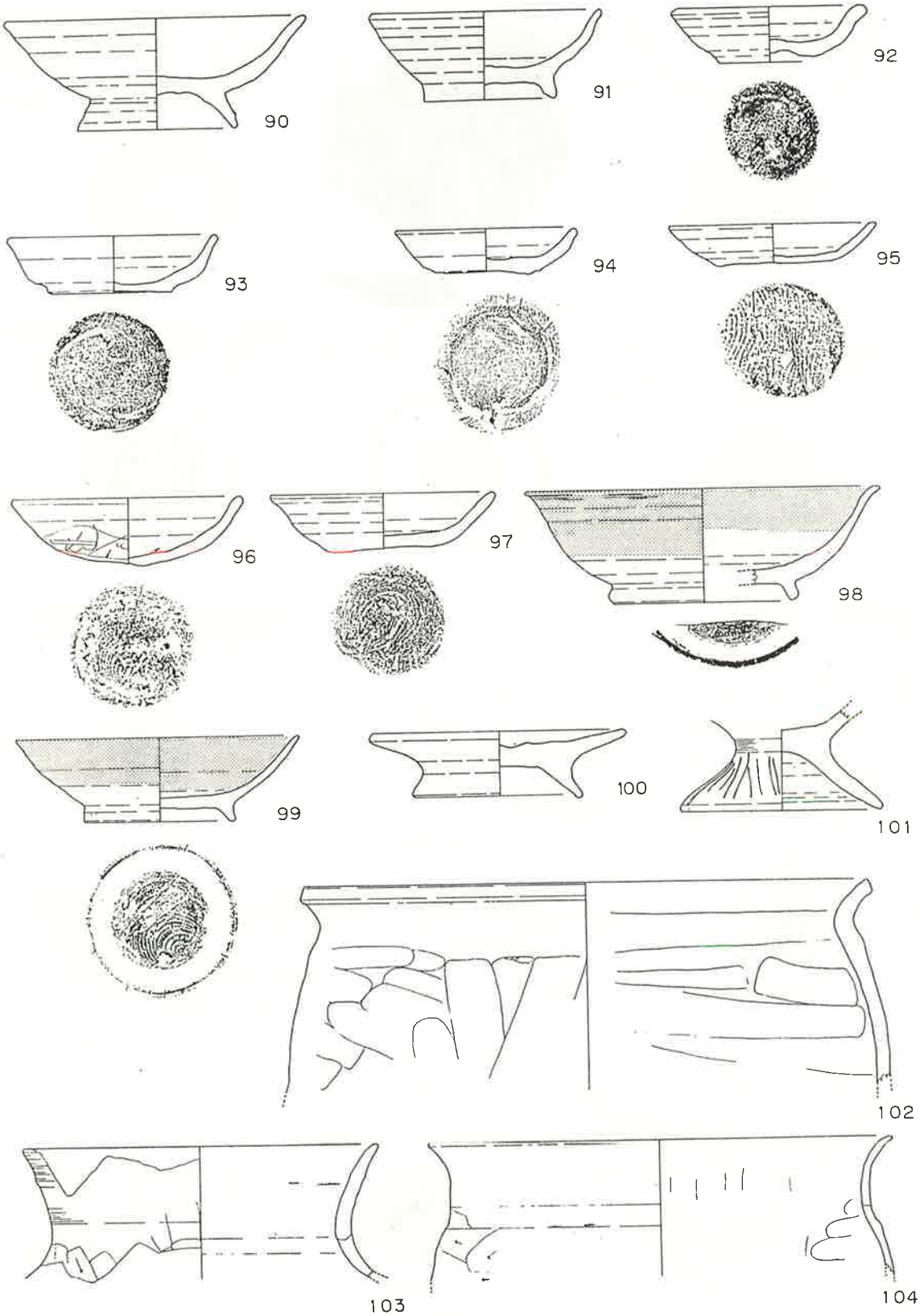
第１９図　紡錘車・杯・高杯実測図



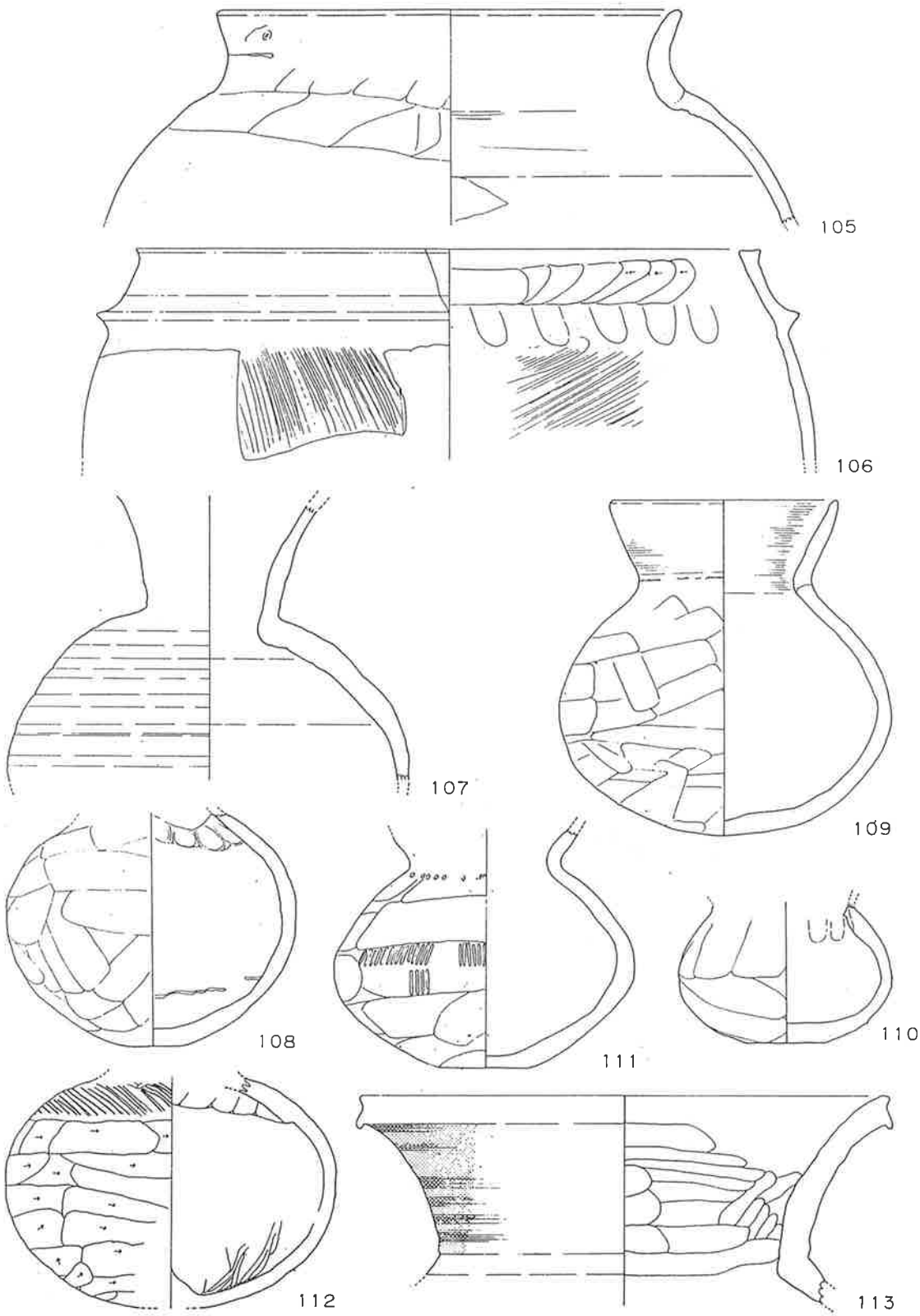
第２０図　須恵器杯・皿・高台付埦実測図



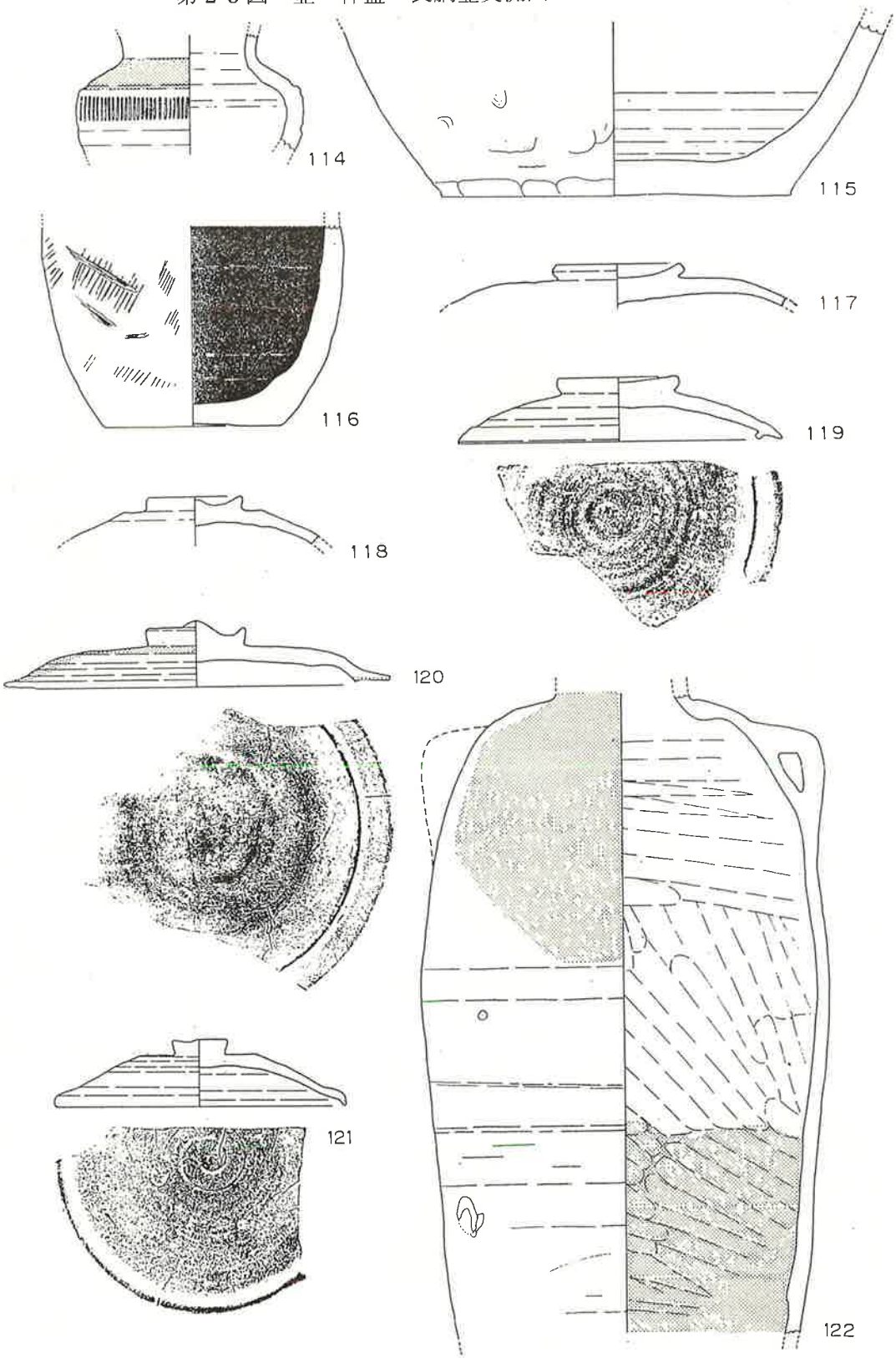
第２１図　高台付埦・甕実測図



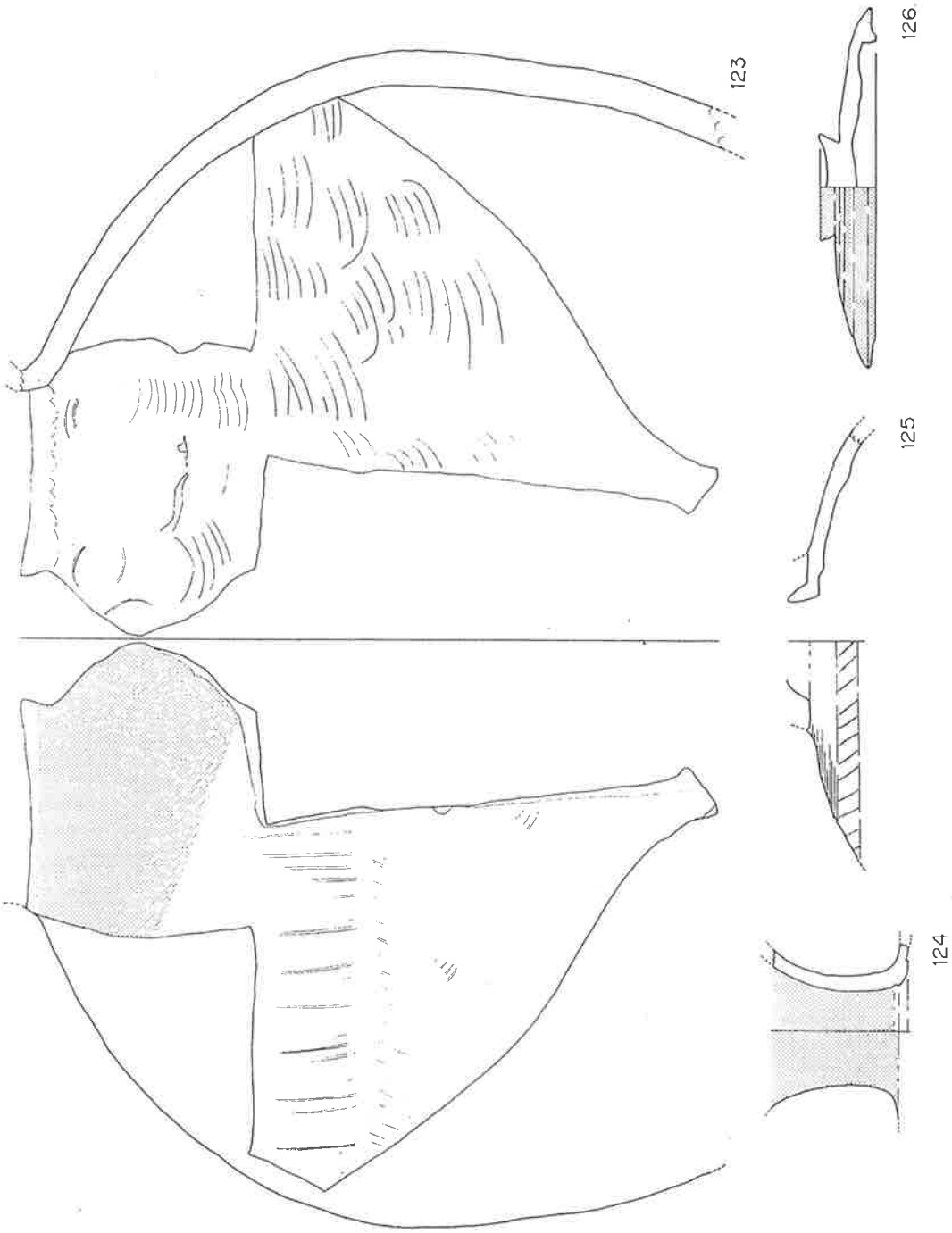
第２２図　壺・羽釜・坩実測図



第２３図　壺・杯蓋・長胴壺実測図



第２４図　須恵器大甕・杯蓋・長頸壺頸部実測図



第４表

植物・木製品観察表

番号	出土位置	器種	樹種	特徴（製作・形状と出土状況）	備考
1	E－8－5	杭	楓	丸木材，長さ１０６cm，太さ9.2～9.6cm先端部は三方から加工，鋭い尖端部を作ったもの，頭部にまくれが見られる。	
2	C－10－9	建築材	クスギ柄	板材，長さ１０５.６cm，巾１４cm，水路の床面	
3	C－2－1	建築材	松	丸木材，梁に使用されたものか，長さ２３６cm，太さ１３.４cm，両端に仕口を作っている。切り込みは１２.２cm表皮は完全にはがされている。	
4	E－7－12	杭	楓	丸木材２５.９cm太さ5.7cm先端は二方向から幅広く，鋭く削られている。頭部にまくれが見られる。	
5	D－8－21	建築材	杉	角材，長さ１００cm，巾１０.３～7.4cm板目材柱状を呈す。	
6	D－7－括	椀		底部外面ロクロに装着した時の刃の痕４ケ所が見られる。底部径6.1cm	素地
7	同上	椀		少し高めの高台部を呈している。内面底部にロクロ痕が見られる。底部径5.6cm	
8	F－3－1	椀		口縁部を欠く。体部は緩く内彎しながら口縁部へ。口縁部はわずか外反し始めた所で欠損している。高台部の痕跡が窺われる。黒漆塗布	漆塗
9	E－6－1	椀		黒色の漆塗　口縁部から体部の一部	
10	E－8 F－8	種子		ひょうたんの仲間の種子と果皮。E－8，F－8グリット付近に集中して確認された	
11	同上	種子		桃，胡桃	
12	D－3－7	柄木	楢	建築材（角材）	
13	D－3－1	板	杉	銅片を付けた板状のもの。	
14	C－8－25	紡織具	不明	両端に突起を持つ。（藁細工用具か） 大阪文化財センター「瓜生堂」遺跡出土の有頭状木製品と同類	
15	C－4－7	柄木	針葉樹	建築材（角材）	
16	D－7－3	柄木	栗	建築材（角材）	
17	E－7－3	燃焼木	栗	全体的に炭化している。	
18	C－4－18 C－4－19	杵	ハナの木	シキミ（櫁）の異称	
19	C－2－10	杵	楢	材質からすると№１８とは用途が異なると考えられる。	
20	C－9－8	手斧柄	松	遺存状態の良い手斧の柄である。台部は幹，枝を握り部に作り出している。 遺存全長（32.5cm）柄の長さ（24.0cm）径（5.0～4.3cm）台部の長さ（17.0cm）台部はその先端部を削り込み斧頭の装着を可能にしている。装着部の削り込みは（5.0cm）。装着部の形状から鉄斧頭は輪状に造られ挿入されたものであろう。 奈良　平城京出土（古墳時代の木製農具）に同類が見られる。	
21	E－8－27	薄板	広葉樹	不明（木篦か）	
22	D－3－8	鋤	樫	「農具」－用具にみる農耕文化のあゆみ－茨城県立歴史館資料によると古墳や各遺跡から発見された鉄製の鍬や鋤は木身に取り付けた鉄の刃先だけであるため，それが鍬先なのか鋤先なのか区別することは困難で……。群馬県埋蔵文化財調査事業団 川原喜久治「農具」の名称に関して　研究紀要第３号による。 とあるが木身だけではやはり鍬先なのか鋤先なのか区別する事は困難である。	
23	C－10－1	鋤	樫	正倉院御物の「子日手辛鋤」の木部と同型種かと考えられる。	
24	D－7－11	田舟	檉	静岡県登呂遺跡　山木遺跡出土品に類似品が見られる。	
25	C－4－1 C－4－2	馬歯		出土状況からすると、当遺跡地は牛池川の氾濫原と考えられる。柳久保Ⅰ遺跡と同種	
26	E－8－括	ヒョウタン果皮		図版８　果皮片の一部に頭頂部が見られる。	
27	F－8－7	横槌	樫	全長（54.5cm）槌部（28.0cm）槌部径（8.5cm）柄部（26.0cm）先端部径（3.0cm）藁細工用具　　握り部上端にまくれが見られる。	

出土遺物観察表

法量の（　）は推定値

番号	出土位置	種類	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器形の特徴　整形の特徴	遺存・備考
28	C−5−1	寛永通寶	江戸東大口町鋳造銭　万延元年12月（1860）				
29	D−6−1	元祐通寶	元祐8年（1093）　北宋（1071）とがある				
30	D−2−15	小瓶	口　(2.6) 底　4.6 高　9.0	石英を含む 硬	灰白	口縁部を欠くが頸部はしまり胴部は丸形を呈す。 （外）頸部から胴部上半は灰釉の一部炭素の吸着により黒色を呈す。 （内）頸部内面回転ナデ。胴部最大値（7.9）cm	ほぼ完形
31	D−2−9	埦	口　(14.6)	均質の胎土である　硬	オリーブ灰	体部は緩く内彎しながら立上がり口縁部はほぼ直線 （外）回転ロクロ整形。「川」字状に施釉をはがす。内ロクロ整形・丁寧なナデ。国府との関連を深める遺物である。	口縁部 1/3残
32	F−4−4	須恵 ミニチュア	底　4.3	砂粒を含む 硬	灰	底部から体部は逆台形状に開く、内外面横ナデ。内面底部には同心円状のリングが見られる。大溝より出土	底部 2/3残
33	B−7−2	土師 ミニチュア	口　(5.0) 底　2.8 高　(2.5)	細砂を含む 軟	灰	胴下部、直線的に開く （外）底部から5mmの所に沈線を施している　ナデ （内）底部から1.5cmの所に沈線　ナデ	底部破片
34	F−4−31	瓦 軒丸	直径（17.4） 胴　(8.4)	白色細砂混入　やや軟	青灰	瓦当部と丸瓦部との接合部、裏面は接合時の指ナデ、一部に布目を残す。瓦当部には層状に粘土を重ねている。国分寺瓦と同種。5瓣の内2瓣が確認出来る。	瓦当部 1/3残
35	C−6−4	瓦 軒平		黒色粗砂を含む　硬	灰	出来上がった平瓦に粘土を盛り上げ頸部はヘラナデ後ヘラ描き文有り。凹面の布目痕はすり消されている。	破片
36	G−5−10	瓦 軒丸		白色の砂を含む　硬	表面　黒 裏面　灰 断面灰白	糸切り痕、中央には貼り付けがあったものと思われる。その周囲に刺突が見られる。	破片
37	C−1	瓦 軒平		黒色細砂を含む　硬	表面　黒	顎頭部のみ、平瓦部へ顎部を羽目込んだ痕が見られる。粘土板の合わせ目あり。側面の面とり3。	破片
38	表	瓦 軒平		黒色砂粒を含む　硬	灰白	布目痕の上を刷毛状の物でスリ消す。つなぎ目痕が見られる。ヘラ書き沈線有り。	破片
39	D−4	瓦		細砂を含む	両面にぶい赤褐 器肉　灰	平瓦凸面に格子文叩き目有り。凹面布目ナデ消す。	破片
40	F−4−27	特殊		粗礫を含む やや硬	極暗赤褐	棒状を呈し表面はヘラ削り後ナデ。差し込み状になった先は内面に接しナデられている。一方の端は丸くナデられイブシが見られる。	
41	C−3	円筒 埴輪	厚　1.5	細砂を含む 軟	暗褐	平行する2本の凸帯をめぐらせ（巾0.9×高さ0.3）cmが貼られタガ及びタガの上下は横ナデ。内面は粗いナデ。	胴の一部
42	D−5−3	瓦 軒平		白色粗砂を多量に含む	灰白	凸面は丁寧なナデが施されている。凹面は布目痕が残る。粘土板剥ぎ取り痕有り。	破片
43	3区a面一括	瓦 軒丸		白色細砂混入　硬	青黒	丸瓦で凸面素文、ヘラ削りにより整形している。凹面布目、一部指ナデ布目を消す。「寺」の字ヘラ書き。	2/3残
44	C−9−4 C−9−5 C−9−6 C−9−11 D−10−5	瓦 平瓦	長　35.4	黒色細砂を含む　硬	灰 （黒色の斑点）	凸面縄目、周囲はヘラ削り。凹面布目、一部ヘラによりスリ消す。全体に釉薬がかかったように見えるのは黒色の鋼物の発泡による。 D−10−5は大溝の床面より出土（溝　No.1）	3/4残
45	C−8	甕	口　(16.8)	細砂を含む やや軟	灰白	頸部の屈曲が鋭角をなす。口縁部より胴部の方が厚い。 （外）口縁部横ナデ、肩部刷毛目。 （内）口縁部横ナデ、肩部指押え	口縁部から肩部
46	E−8−8	甕	口　(16.4)	細砂を含む 硬	灰白	口縁部はS字状を呈す。口縁部が胴部より厚い。 （外）口縁部横ナデ、肩部刷毛目。No.45より刷目痕が細かい （内）口縁部横ナデ、肩部指押え	口縁部のみ 1/4残
47	D−7−3	杯	口　14.2 高　5.2	粗砂を多量に含む　やや硬	赤褐	ほぼ均一した厚みを持ち口唇部で薄くなる。底部から胴部は球形を呈し口縁部はわずかに外反する。 （外）口縁部及び頸部はヘラ調整後丁寧な横ナデ、胴部はヘラ調整、底部は不定方向ヘラ削り。 （内）口唇部は横ナデ、頸部はナデにより緩やかな稜を持つ、胴部から底部は丁寧なナデ。	ほぼ完形

番号	出土位置	種類	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器形の特徴　整形の特徴	遺存・備考
48	C－8 D－8 E－3 E－8－5	杯	口　13.5 高　5.2	粗粒を含む 硬	明赤褐	体部から底部にかけて厚みを持つ、口縁部は薄く丸い。 （外）体部上半部迄ヘラ削り、口縁部横ナデ。 （内）体部にヘラ研磨痕、全体にナデ	口縁部 1/2 欠
49	C－9－43	杯	口（12.6） 高（5.1）	粗粒を含む 硬	暗赤褐	胴部上半部に厚みを持つ、底部から胴下半部は扁平に立ち上がり、上半部はほぼ直に立つ、口縁部は外反する。 （外）頸部は横ヘラ調整後横ナデ、胴部はヘラ削り後ヘラ調整 （内）全体は丁寧なナデ、細い放射状研磨が残る。	口縁から胴部 1/4 残
50	D－8－8 D－8－9	杯	口　13.8 高　5.3	緻密　硬	暗赤褐	底部がやや厚みを持ち口縁部「く」字状に外反し口唇部で立ち上がる。 内外面口唇部は横ナデ、外面体部底部はヘラ削り、内面体部にヘラ研磨　底部はナデ、丸底全体に炭化物が付着する。	口縁部 1/3 欠
51	D－7－1 D－7－2	杯	口　13.4 高　5.3	粗砂を含む やや軟	橙	底部に僅か厚みを持ち口縁部で薄く外反し緩い内稜を持つ口端部は丸い。 （外）口縁部横ナデ胴から底部はヘラ削りしたが風化が強くヘラ跡が確認しにくい。底部に炭化物の付着が見られる。 （内）丁寧なナデ調整後左上がり放射状研磨が見られるが確認しにくい。	4/5 残
52	D－8－5	杯	口（14.6） 高　5.5	粗砂を含む 硬	橙	ほぼ均一な厚みを持ち、口唇部で薄くなる。底部から胴部にかけて球形を呈し口縁部は「く」の字状に外反する。 （外）口縁部及び頸部はヘラ調整後丁寧なナデ。胴部はヘラ調整、底部は不定方向ヘラ削り。 （内）全体に丁寧なナデ、巾2～3㎜の放射状研磨が残る。	3/4 残
53	D－2－1	杯	口（16.4） 高　7.4	砂粒を含む 硬	暗赤褐	胴下半部は扁平、上半部はほぼ直に立つ、口縁部は外反する。口端部は丸味を持つ。 （外）頸部はナデ胴上半部は指押さえ、胴下半部は丁寧なヘラナデ、右方向ヘラ削り。 （内）内面全体丁寧なナデ後胴部に右上がり研磨。底部中央が僅か窪む。	2/5
54	表	砥石	長（5.7） 短　2.3 高　1.0	硬	灰黄褐	5面使用し、その内4面が多用されている。一方の端が欠損している。 石質は砂岩である。	
55	E－3	砥石	長（4.4） 短　3.8 高　2.4	密な粘板岩 軟	浅黄橙	5面とも使用痕有り。その内3面が多用されている。 一方の端が欠損している。	
56	3区b面 一括	砥石	長　5.1 短（3.9） 高　2.7	やや粗 硬	紫黒	4面使用し、その内1面が多用されている。 両肩と一方の端が欠損 石質は安山岩	
57	C－7 －S－5	砥石	長（5.0） 短　3.7 高　3.2	硬	暗灰	4面使用し、その4面とも多用されている。一方の端が欠損している。使用されていない面には加工時の条痕がある。 石質は粘板岩	
58	D－4－3	紡錘車	厚　1.7	軽石	暗青灰	軽石を円板状に研磨　穿孔はやや左側に片寄る。	
59	C－2－2	紡錘車	厚　0.8	密　硬	橙	土器底部を再利用、硬い焼きから杯の底部を利用したものと思われる。	
60	D－6－3	紡錘車	厚　1.0	砂粒含む軟	灰	土器底部を利用紡錘車としては完形と考えられる。	
61	C－4－16	紡錘車	厚　2.1	軟	緑灰	截頭円垂形である。上面直径は2.4cm、下面径は4.4cmを測る穿孔は上面が下面より1㎜大きい。側面研磨による状痕がある下面との稜の部分も研磨により角を丸くしている石質は蛇紋岩	
62	D－5	杯		細砂を多量に含む　硬	外　にぶい黄橙 内　赤褐	体部内面に墨書が見られる。体部下半部にヘラ削り痕。 内面は丁寧なナデ、底部にイブシ	体部の一部墨書
63	C－4－3	高杯	口（15.3）	粗砂を含む やや軟	明黄褐	ほぼ均一した厚みを持つ。底部から口縁部まで内彎ぎみに立つ口辺部は鋭い、体部との境にはっきりした稜を持つ。 （外）口縁部はヘラ調整、口辺は特に鋭く細くなる。体部は丁寧なナデ （内）回転ナデ後ヘラ研磨、口縁部内面に「口」の墨書。	墨書「口」
64	D－5－13	高杯 脚	上　3.4 下　5.2	粗砂を含む 硬	外　赤灰 内　暗赤	高杯の脚柱部、杯接合部が最小、裾の接合部が最大径を持つ、裾は大きく開く。 （外）脚柱部はヘラ整形ヘラナデ、裾部も杯部も不明。 （内）6面のナデ	脚柱部
65	3区b面 一括	高杯	口（15.8）	細砂　硬	赤橙	高杯の杯部、ほぼ均一の厚さを持つ、口縁部は丸く底部は平坦に保、底部と体部の境に稜を持つ、内面には丁寧なヘラ研磨が見られる。	杯部 1/5 残

番号	出土位置	種類	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器形の特徴　整形の特徴	遺存・備考
66	D−4−2 （E−3 4.5）	高杯	口　（18.6）	粗砂を含む 硬	内　橙 外　赤褐	杯部と脚部の接合部に凸起を持つ。円板状平坦面から直線的に内彎しながら口縁に至る。口唇部は内傾する。 （外）円板状接合部から口縁部は指ナデ後ヘラ磨き、接合部指押さえ。 （内）丁寧なナデの後ヘラ磨きが口縁部から底部平坦面まで及んでいる。	杯部 1/2弱
67	C−4	高杯	口　18.5	粗砂を含む やや硬	にぶい黄	体部から口辺にかけて薄くなる。杯部中位に段を持つ。口縁部はなだらかに外反する。口縁の先端は丸い。 （外）口縁から体部迄回転ナデ、体部から脚柱迄は指押さえ後ヘラナデ。 （内）口縁から体部は右回転ナデ。一部左上がりのナデ。	杯部3/4
68	F−9−2	杯	口　10.4 高　3.6	細砂を含む やや軟	明赤褐	底部手持ヘラ削り、底部は丸味を持つ、口縁部は内傾し横ナデ内面は全面ナデ。	1/2残
69	D−8−1	杯	口　13.4 高　4.9	砂粒を含む 硬	暗赤褐	ほぼ均一した厚みを持ち、口唇部で薄くなる。底部から胴部は球形を呈し、口縁部で内彎する、口端部は丸い。 （外）口縁部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り後ヘラナデ （内）底部は丁寧なナデの後爪型が多数残されている。整形後右上がり放射状研磨。	1/2
70	D−5	杯	口　（12.0） 高　3.5	細砂を僅か含む　硬	にぶい赤褐	底部から胴部にかけては丸味を持って彎曲し口縁部は直状に外傾し口唇部は僅かに外反する。頸部に不明瞭な外稜を持つ。 （外）口縁部横ナデ彎曲部指押さえ痕めぐる。体部から底部はヘラ削り。 （内）口縁部横ナデ　底部ナデ　平底、器壁は薄い。	1/4
71	E−7−1 E−7−2	杯	口　11.7 高　5.7	粗砂を僅か含む　硬	暗赤褐	器肉は均一で体部は丸みを持ち、口縁部は直立する。口唇部欠損。体部との境に稜を有する。 （外）口縁部横ナデ、底部はヘラ削り後ナデ。 （内）内面は横ナデ。	2/3残
72	C−8−1	杯	口　12.4 高　6.0	細砂を含む 硬	にぶい赤橙	底部の中心から体部に向かって薄くなる。口縁部は直立する。体部との境に稜を持つ。 （外）底部はヘラ削り、口縁部横ナデ。 （内）丁寧な横ナデ、底部は同心円状の整形痕を示す。	ほぼ完形
73	C−9−31 C−9−32 C−9−33	杯	口　12.8 高　5.6	砂粒を含む やや硬	橙	ほぼ均一した厚みを持つ、底部は丸底で外稜を持ち口縁部は直立する。肩部にイブシあり。 （外）口縁部は横ナデ、底部はほぼ一定方向にヘラ削り後一部ヘラナデ。 （内）口縁部横ナデ後底部は回転ナデ、ナデ痕は口縁部を縦に横切る。	3/4残
74	E−8,9 b面一括	杯	口　13.0 高　5.3	粗い砂粒を含む　やや硬	暗赤褐	口縁部がわずか底部より厚みを持ち、明瞭なる稜を持つ。口縁部は直立する。口縁部内外面同時に横ナデ最後に中位から口唇部へ抜き取っている。底部外面はヘラ削り後一部ヘラナデ。内面底部はヘラ調整後ナデ。	1/2強
75	C−8−2	杯	口　（14.6） 底　（6.1） 高　4.2	微細砂粒を含む　やや硬	灰白 イブシ黒	体部は内彎しながら立ち上がり口縁との境で凹帯を示す。 （外）底部は回転ヘラ切り、口縁部ナデ調整。 （内）回転ロクロ整形、底部はやや上げ底。	1/3残
76	2区b面一括	杯	口　（12.0） 底　6.8 高　3.8	微細砂粒を含む　硬	灰白	深い体部は大きく内彎しながら立ち上がる。全体に器厚である （外）口縁から4㎜に凹がある。回転糸切り後ヘラ調整。 （内）内外面回転ナデ、平底で中央部は特に厚い。	1/3残
77	2区b面一括	杯	口　（12.6） 底　9.0 高　3.9	細砂粒を含む　硬	外　灰白 内明赤灰	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。 （外）回転ヘラ削り後横ナデ。目の荒い糸による回転糸切り。 （内）回転横ナデ。内側には朱が付着している。	1/3残
78	G−4−43	椀	口　（12.6） 底　6.8 高　4.0	粗い砂粒を含む　やや軟	灰白	体部は内彎しながら立ち上がり口縁部でわずか外反する。 （外）底部回転糸切り後高台の貼り付け痕を残す、粗い回転ナデ。 （内）底部はやや上げ底、回転ロクロ成形、　　煤痕あり。	1/2残
79	F−10−24	椀	底　8.4	細砂を多量に含む　軟	内　黒 外　にぶい黄橙	回転糸切り痕、体部は大きく内彎しながら立ち上がる。高台の接地面を水平にヘラナデされている。 （外）回転ナデ整形。高台は貼り付け接合痕を残す。 （内）内面全体に墨が凝着している。墨の刷毛目1.7㎝巾が見られる。	底部完形 口縁部欠
80	E−10−1	皿	口　12.4 底　6.4 高　2.0	細砂　軟	明紫灰	体部は浅くわずかに外反しながら開く、高台は直立する。釉は刷毛塗り。 （外）口縁から体部は回転ナデ、高台部内側回転糸切り痕。 （内）回転ナデ。体部から底部の境には2本の同心円状の段を持つ。	完形

番号	出土位置	種類	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器形の特徴　整形の特徴	遺存・備考
81	F−8−I	盤	口 18.9 底 13.0 高 3.6	細砂を多量に含む　軟	内　にぶい黄橙 外暗緑灰	底部から体部にかけて緩い傾斜を持ち口縁部は直に立つ。高台は貼り付け接地点は内傾する。 外面回転指ナデ。内面はロクロ整形。	口縁部を1/3欠
82	3区b面一括	皿	口 11.4 高 2.3	細砂 やや軟	灰白	体部から口縁にかけて外反する。釉は内側刷毛塗り、その後漬け掛け。 （外）高台部回転糸切り、口縁から高台迄ナデ高台は直立して短い。 （内）回転ナデ、底部中央に指の跡を残す。体部と底部の境に段を持つ。	ほぼ完形
83	C−5−13	椀	口 9.3 底 5.8 高 5.0	粗　軟	灰赤	高台は貼り付け （外）体部ロクロ痕、底部回転糸切り。 （内）整形は丁寧でない	口縁部1/2残
84	C−5−11	椀	口 9.8 底 5.9 高 4.2	粗　やや軟	にぶい橙	口縁部は2箇所欠損、高台は貼り付けナデ調整。 （外）ロクロ痕明瞭、丁寧なナデ調整。 （内）ロクロ痕。	ほぼ完形
85	C−5−15	椀	口 (9.8) 底 5.8 高 4.2	粗　軟	暗赤褐	口縁部がわずかに外反する。高台は貼り付け、丁寧なナデ調整 （外）ロクロ痕 （内）ロクロ痕	体部から口縁部は2/3欠
86	D−1−3 D−1−4 F−4	椀	口 15.8 底 7.2 高 6.9	細砂を含む 硬	灰白	体部は深く、大きく内彎しながら立ち上がる。 （外）ナデ調整。高台は糸切り後貼り付け。 （内）口唇部と底部中央に沈線が見られる。体部下位迄漬け掛	ほぼ完形
87	D−5−7	椀	口 (15.2) 底 8.4 高 5.1	僅かに砂粒が見られる 硬	灰白	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直線的に僅か外反する。高台の先端は丸味を持つ。 （外）高台部は丁寧な回転ナデ。 （内）内側のみ薄い灰釉が見られる。	口縁部1/6 高台1/2
88	C−5−6	椀	口 9.8 底 5.7 高 4.2	粗　軟	外暗赤褐 内にぶい褐	接合部はナデ調整 （外）ロクロ痕明瞭、底部は糸切り。 （内）丁寧なロクロ整形。	完形
89	D−5−4	椀	口 (9.8) 底 5.8 高 4.2	粗　やや軟	にぶい橙	体部は大きく内彎しながら立ち上がり高台部は器高である。口辺はわずか外反。 （外）全体にロクロ痕を呈す、高台の貼り付けは丁寧。 （内）丁寧なナデ調整	完形
90	E−10−2	椀	口 13.8 底 7.3 高 5.2	細砂を多量に含む　やや軟	外にぶい赤褐 内明黄褐	体部は内彎しながら立ち上り口縁部は僅か外反する。底部程器厚を呈す。 （外）体部ロクロ痕は良く撫でられ、太く長い高台はロクロ痕と3本の帯状凹部が見られる。 （内）右回転ロクロ痕	ほぼ完形
91	D−3−1	椀	口 10.8 底 6.1 高 4.1	やや粗　軟	明赤褐	体部は大きく内彎しながら立ち上がり器厚である。 （外）全体にロクロ痕。高台貼り付けやや雑。 （内）口縁部に煤。	完形
92	C−9−10	杯	口 9.0 底 4.6 高 2.6	細砂を多量に含む　軟	浅黄橙	器肉は厚く底部は中央で上げ底を呈す。口縁部は厚く丸味を持つ。 （外）糸切り後ヘラナデされ、わずかに糸切り痕を残す。 （内）体部中央に沈線が見られる。	完形
93	C−10−1	杯	口 9.6 底 5.6 高 2.6	細砂のほか粗粒を含む 軟	灰白	底部回転糸切り痕。底部の厚い糸切りが行われている、その為体部下端と底部との間に段を持つ。 （外）回転糸切り痕、ヘラナデ　すり消し　内外面回転ナデ。 （内）底部中央突起を持つ。	完形
94	E−5−1	杯	口 8.5 底 4.5 高 2.1	黒色の細砂を多量に含む　軟	暗赤褐	底部糸切り痕明瞭。体部は緩い傾斜で内彎しながら口縁に至る （外）内外面に煤が見られる。　体部回転ナデ。 （内）回転ナデ。	完形
95	D−11−3	杯	口 9.6 底 5.7 高 2.8	黒色の細砂を含む　軟	浅黄橙	荒い糸による糸切り痕。体部はわずかに内彎する。口縁部は直線的に口唇部に至る。　内外面簡単な回転ナデ。	完形
96	C−5−2	杯	口 10.6 底 5.7 高 3.1	細砂を含む やや軟	明青灰	底部は糸切り痕を残すが丸く突出している。体部は内彎しながら立ち上がり口縁部はわずか外反する。 （外）体部、底部に不定方向の繊維痕有り。底部に煤。　回転ナデ。 （内）粗いナデと指のあとを残す。口縁部の整形は一定でない	完形
97	G−3−3	杯	口 10.4 底 5.0 高 2.7	粗砂を多く含む やや軟	にぶい橙	体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。器肉は厚い （外）回転ナデ、底部糸切り痕。　煤体部半面に見られる。 （内）丁寧な回転ナデ。	口縁部1/4欠

番号	出土位置	種類	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器形の特徴　整形の特徴	遺存・備考
98	D−3−2	埦	口　（16.4） 高　（5.2）	黒色の細砂を含む 硬	灰白色の素地に釉	体部は内彎しながら口縁部で大きく外反する。器肉は薄い。 （外）体部に窯内での接触痕あり。高台は糸切り貼り付け、丸味を持つ。 （内）回転ナデ。	1/3
99	3区b面 一括	埦	口　（9.3） 底　5.8 高　5.0	細砂を含む 硬　灰釉	灰白	体部は大きく内彎しながら立ち上がる。直線的な高台を持つ。刷毛による施釉後漬け掛け。 （外）荒い糸による回転糸切り痕。高台は貼り付け接合部は丁寧なナデ。 （内）内外面ロクロ痕明瞭。口縁は底部境迄2回目は体部中位迄の施釉。	口縁部 1/4
100	H−5−1	器台	径　11.9 底　7.7 高　3.2	粗砂を含む やや軟	暗赤褐	平坦な皿状受部と脚部は貼り付け。内外面とも回転ナデ。受部の底は回転糸切り痕が窺われる。外面の一部にイブシが見られる。	受部 1/3残
101	C−5−3	器台	底　9.2	細砂を含む 硬	赤橙	内外とも回転ナデ、外面ヘラ研磨。脚部と受部との接合痕。裾に煤が見られる。	脚部3/4残
102	E−3	甕	口　（35.8）	砂粒を多量に含む　軟	外暗赤褐 内　黒	ほぼ均一の厚みを持つ。頸部は少しくびれ口縁部は短く外反する。 （外）口縁部は横ナデ、胴部は不定方向ヘラ削り。 （内）口縁部は指による横ナデ。	口縁部 1/4残
103	D−8−3 D−8−4 E−5−4 2 b 一括	甕	口　16.2	粗砂を含む やや硬	オリーブ灰	口縁部は「く」の字状に外反し肩は張らない。口唇部は薄くなる。口縁部横ナデ、胴部外面は縦位のヘラ削り。内面は横ナデ、肩部から口縁部にかけて輪積み痕残る。	口縁部のみ
104	C−4−66	甕	口　（21.4）	細砂を含む 硬	暗赤褐	口縁部は「コ」の字状を呈する。粘土紐痕。口縁部内外面横ナデ、胴部外面は左横位の削り。	口縁部 1/3残
105	C−2−1	甕	口　（21.0）	細砂を含む 硬	橙	口縁部は「コ」の字状を呈し口辺は丸みを持つ。胴部中位に最大径を持つと考えられる。 （外）口縁下部押圧痕、胴上部横方向ヘラ削り。 （内）口縁部横ナデ、頸部接合痕、胴部ナデ。	口縁付近 1/4残
106	E−3	羽釜	口　（28.0）	粗砂を含む やや軟	灰褐	口縁部は大きく内彎する。鍔は小さく断面は三角形を呈し口唇部は厚い。 （外）口縁部横ナデ。鍔は摘み出し。　胴部は刷毛ナデ整形。 （内）口縁部左方向指押さえ、胴部は右上から左下方向に刷毛目。	口縁部 1/3
107	C−4−1 C−5 F−4−12	壺	口　（8.6） 胴　18.0	緻密である やや硬	外　黒 内　にぶい黄橙	口縁部は逆台形を呈し胴部は球形である。内外面回転横ナデ。炭化物の付着が多く見られる。口縁部と胴部の接合面はヘラナデ。底部は丸底で不安定。	口辺と底部を欠く
108	D−5−14	壺	胴　13.5 底　4.1 高　10.6	細砂　軟	外　橙 内　灰白	頸部は「く」の字状に屈曲、最大径は胴下部に位置する。扁球形　平底。 （外）口縁部横ナデ、胴下半部ヘラ削り、頸部に丸い工具による刺突あり。 （内）口縁、胴上半部共にナデ、胴下半部櫛目が6面施され底部中央に集中。	頸～底部 口縁部を欠く
109	D−5−16	壺	底　3.4 胴　9.6	細砂粒を含む 硬	黄褐	胴部の最大径を中位やや下方におく。小さな平底を持つ。頸部接合痕が見られる。炭化物の付着有り。 （外）胴上半部はヘラ削り後ヘラナデ、胴下半部はヘラ削り後簡単なナデ。 （内）頸部接合部分は指押さえ、他はナデ。	胴部 1/2残
110	G−4−3	壺	高　13.0	細砂を含む 硬	赤褐	胴部最大径を中位にとる。ほぼ球形を呈する。炭化物の付着が見られる。 （外）ヘラ削り後ナデ、胴部下半部は粗いナデ。 （内）輪積痕を残。頸部の接合痕は指押さえ。底部の接合はナデ。	胴部のみ
111	D−4−1	壺	口　（10.3） 胴　14.9 高　15.3	粗砂混　軟	外　煤黒 内　褐	頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部は扁球形。丸底。 （外）口縁部横ナデ、胴部丁寧なヘラナデ、胴下半部横方向ヘラ削り。 （内）口縁部横ナデ、頸部接合指押さえ。	口縁部 2/3欠
112	C−4−14	壺	胴　14.8	細砂を含む 硬	にぶい赤褐	胴部最大径は中位にある。ほぼ球形を呈する。 （外）肩部はヘラ磨き、胴中位から底部迄左から右方向へのヘラ削り。 （内）頸部接合用粘土の盛り上がりあり指押、細いヘラナデ後ナデ。	胴部～底部

番号	出土位置	種類	法量（cm）	胎土・焼成	色調	器形の特徴　整形の特徴	遺存・備考
113	D−5−2	甕	口　（24.2） 頸　（16.7）	白色細砂を含む　硬	外暗青灰 内　灰 器肉暗赤褐	口縁部はほぼ直線状に開き、口唇部は外反し折り返す。横ナデによる整形。口縁部は沈線で2段に区画し、頸部まで横ナデ整形。頸部と肩部の接合痕が見られる。	口縁部 1/2
114	F−5−7	小型壺	胴部最大径 （10.0）	わずかに細砂を含む 硬	黒 器肉暗赤褐	直立した頸部は内外面横ナデ。肩部は淡黄色を呈し胴部との境は3本の沈線で区画され、第2第3の沈線の間には、櫛目が見られる。内面は全体に横ナデ。	頸部〜底部 1/4
115	C−5 3区b面 一括	壺	底　（15.6）	粗砂を多量に含む　軟	暗青灰	底部と体部接合痕有り、底部より内彎しながら立ち上がる。 （外）指押さえの指紋を多量に残す。 （内）輪積みの接合指押さえ痕を残す、その後回転指ナデ。	底部1/2
116	3区b面 一括	甕	底　7.8	粗砂を含む 硬	暗青灰	外面平行状叩き目、底部は内彎しながら締まる。 内面は回転横ナデ、黒色の付着物が見られる。	胴下半部から底部
117	C−7−6	蓋	口　（15.0） 摘　5.8 高　2.0	粗　白色の鋼物　硬	青灰	ロクロ整形。 （外）天井部回転ヘラ切りその後ナデ、つまみの凹に指圧痕有り。 （内）ロクロ指ナデにより中央部盛り上がる。	1/6
118	3区b面 一括	蓋	摘　4.1	黒色の砂を含む　硬	灰白	天井部回転ヘラ削り内外面回転ナデ、リング状摘みの中央が丸く突出する。	蓋の中央部のみ
119	F−5−8	蓋	口　（12.4） 摘　5.4 高　2.8	やや粗 硬	灰白	天井部ヘラ切りは無し、摘みは中央部が凹状を呈する。 （外）天井部回転糸切り痕。 （内）内側に「かえり」を持つ	1/5
120	F−5−1	蓋	口　（15.2） 摘　4.3 高　3.0	細砂　硬	外灰黄褐 内　青灰	ロクロ整形。凹を持つ摘みは中央部が周囲より高い。 （外）天井部回転ヘラ削り。自然釉 （内）回転ナデ、内側に「かえり」を持つ。	2/5
121	F−5	蓋	口　（13.0） 摘　2.5 高　3.0	細砂　硬	青黒	口唇部は直に下に折れる。 （外）天井部回転ヘラ削り。 （内）回転ナデ、重ね焼き痕有り	1/3
122	G−3−6	瓶	胴部最大径 18.2	白色細砂を含む　硬	外　青黒 内　青灰 器肉 暗赤褐	外面全体横ナデ、頸部径6cm、肩部には把手を持ち自然釉が見られる。 胴部に最大径、底部に向かってわずかづつ狭まる。下位に沈線内面頸部から胴上半部は横ナデ、中位に右下方向刷毛目があり下部に接合痕、最下端に横ナデ。	胴1/3
123	3区b面 一括 C−6−3	甕	胴部最大径 48.8	白色細砂を含む　硬	外暗青灰 内　灰 器肉 暗赤褐	肩から胴部破片丸みを持つ、焼締り有り。外面は平行叩き目文に自然釉、内面指頭圧痕後青海波文が見られる。黒色鋼物が多量に見える（外面ではこれが発泡している）。頸部と肩部の接合痕。肩部中位に粘土紐による接合痕がある。	胴部1/6
124	C−5−5	瓶	頸部最小径 （4.6）	白色細砂を含む　硬	灰白	瓶の頸部。頸部と胴部の接合部分に粘土紐を使い指ナデが見られる。 （外）回転ナデ。刷毛による施釉がされている。 （内）刷毛による施釉（施釉時のタレ接合部まで達する）	頸部のみ
125	3区b面 一括	壺	肩部最大径 （18.0）	黒色の砂粒を含む　硬	青灰　素地は灰白	壺型土器の頸部から胴部迄の接合部、特に頸部の接合状態が良くわかる。 （外）肩部に7本の櫛描き列点文、その上部に沈線を施し、全体に櫛目が入っている。 （内）頸部と肩部に接合時の段差が見られる。回転ナデ。	肩部1/4
126	3区b面 一括	蓋	口　15.0 摘　4.4 高　2.3	やや粗　硬	外　灰褐 内　紫灰	口縁から急傾斜で一回ヘラ削り後緩い傾斜のヘラ削り。 （外）全体に自然釉。回転ヘラ削りによる成形。 （内）ロクロ回転ナデ。	2/3残

第Ⅴ章　まとめ

第1節　木製農工具について

日本の農業開始時期については、昭和53年福岡市板付遺跡[1]，昭和61年佐賀県唐津市菜畑遺跡[2]から、水田址が検出されるなど九州北部では縄文時代晩期にすでに水田稲作が始まっていたとする説が有力となってきている。

以後　日本の農業と言えば稲作を示すほど重要な作物となっている。弥生時代の稲作は低湿地を利用した湿田で営まれ、農具としては木製の鍬・鋤・田下駄などが用いられている[3]。弥生時代後期には鉄製農工具の普及により農業技術は著しく発展した。

鍬や鋤の発達は生産力を高め、生産物の蓄積を可能にし、集落内に貧富の差や身分の差を生じた。

弥生時代の主だった農耕具には堅臼・堅杵・箕・田下駄・ワラ仕事の道具等はどれも最近まで使われた農具の原形そのものである。

古墳時代の農具の特徴としては、鉄製農具の普及があげられる。弥生時代以来の木製農具も依然として広く使われていますが、古墳時代の農具は、これらの木製農具を鉄におきかえたり，一部に鉄の刃先をつけたりした。鉄製農具の発達と普及は生産の上でも著しい進歩をもたらした[4]。鉄製の鍬、鋤は深耕を可能にし、鉄製馬鍬は開墾に威力を発揮し、鉄鎌は収穫の能率を高めた。

5世紀中頃に鉄製打鍬からU字型鍬先へ変化し鎌も直刃鎌から曲刃鎌へと変化した時期である。さらに7世紀になると茎付鎌があらわれる[5]。

奈良時代になっても、農具の基本的な形態は、古墳時代と殆どかわりない。
ただ奈良時代以降は文献資料からもその実態をくわしく知る事が出来る[6]。

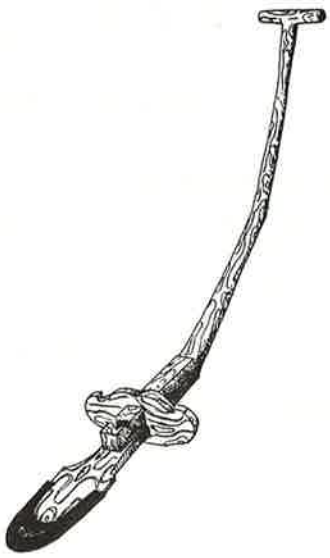
大化の改新以降班田収授法によって区分田を与えられた。一方租・庸・調・雑徭などの負担をおう事が義務付けられた。

7世紀末から8世紀にかけて大賜品として鉄製農具が含まれている。

奈良時代の農具について語るとき、必ず触れなければならないものに、正倉院御物の「子日手辛鋤」があります。この鋤は、柄の文字によって天平宝字2年（758）1月3日に孝謙天皇によって儀式に用いられた事がわかっています。

平安時代

「倭名類聚鈔」によると第１９５に農耕具が説明されている。犁－カラスキ・鋤－スキ　・鑿－クワ・鎛－サイズエ・鋤－カナガキクシロ・　馬杷－ウマクワ・櫂－サライ・杈－エブリ・枚－コスキ・鎌－カマ・連枷－カラサオ等の農具が説明されており、又同じ頃編纂された「延喜式」の農具についての記載では鍬－クワ・鋤－スキ・馬鍬－ウマクワ・辛鉏閑良－カラスキノヘラ等の記載がある。鉄製農具が諸物に記録されており一般農民にも普及したことが窺える。



第２５図　子日手辛鋤（正倉院御物複製）

註

(1)	森貞次郎 岡崎　敬	福岡市那珂町字板付	板付遺跡	１９６１年
(2)		佐賀県唐津市 1980年12月～1981年8月31日	菜畑遺跡	１９８１年
(3)	小林行雄 末永雅雄	大和唐古弥生式遺跡の研究	唐古遺跡	１９４３年
	日本考古学協会	静岡県	登呂遺跡	１９５２年
	平野進一 大江正行	群馬県高崎市 〃　　日高遺跡の調査	日高遺跡	１９７８年
	正岡睦夫 柳瀬昭彦	岡山市 百間川遺跡の水田跡	百間川遺跡	１９７８年
	辻　広志	服部遺跡発掘調査概報	服部遺跡	１９７９年
	村越　潔	弥生期最北の水田址	垂柳遺跡	１９８３年
(4)	鬼頭清明	古代の村（古代日本を発掘する－６）		１９８５年
(5)	茨城県立歴史館	農具－用具にみる農耕文化のあゆみ		１９８６年
(6)	川原嘉久治	農具の名称に関して	研究紀要３号	１９８６年

第２節　遺構と遺物について

寺田遺跡の調査は、前章までに述べたような結果を得た。上野国府に関する多くの調査報告からみて大溝遺構や溝内及び牛池川の氾濫原から出土した多数の遺物と大溝遺構は、上野国府との係わりを濃厚に示すものと考えられる。

出土遺物は磨耗が少なく、板等も加工痕がすりへることなく、又虫の羽根も瓜の仲間の種子なども葦繊維堆積物も長期にわたり折り重なって発見された。このことから遺物は（小破片をのぞき）そのほとんどが長時間かかって流れて来たものとは思われない。浅間Ｃ軽石降下時点ですでに湿地の地形をなし、柳・ニセアカシアが繁茂し、ＦＡ降下により湿地は次第に乾燥しはじめ、Ｃ－２～Ｅ－２グリット，Ｃ－４～Ｅ－３グリットを結ぶ地域は、浅間Ｂ軽石降下時期には生活可能な地形を呈していたと思われる。

木製遺物は総数４７８点、出土地点を測定したものが383点、（加工木１２９点、自然木254点）であった。大きな物にはニセアカシアの自然木で長さ２１８㎝太さ１８㎝や加工木でもＣ－２グリットから長さ２３７.４㎝太さ１１～１２㎝の梁材が出土している。図版№２７の横槌は杭のように打ち込まれた状態で出土した。

加工木は、割材、角材、板材（内１点は銅片付き板材）、柄木、棟木、梁等が出土している。その他に燃焼木が数点見られた。

ヒョウタンの仲間については（写真図版№２６）果皮片が数点出土している。そのうち１点は頭頂部が確認出来る。種子は４７３点、長辺１４㎜短辺６㎜であった。

昆虫の鞘翅目の羽根が２点採拾された。

第３節　そ の 他

上野国府についての記述は「倭名類聚鈔」に初見され所在地については「上野国神明帳」等の研究から現在の前橋市大友町と元総社付近を上野国府跡と想定している。いずれにせよ南限については同一線上を取っている。（Ｗ－１）の大溝は昌楽寺、東側の溝を直線的に結ぶ事の出来る位置にある。

平城京の都城の堀割りからしても、公の施設の建物には、治水の面と灌漑及び飲料水の確保の意味からも河川の改修は必要としていたであろう。又これだけ大規模

な工事を行いうるのは、古墳，館，国衛，郡衛等を建設して来た豪族の手によらなければ行ない得ないと思われる。更に№４３の瓦には「寺」の字がヘラ描きされており、前沢和之氏「上野国分寺について」の論攷の中でこの瓦は宛先を書いた物であることが考えられるとしている。図版№２８小瓶や図版№２９の青磁埦の破片もこの地が国府縁辺故の資料と言えるであろう。

大溝全景空中撮影

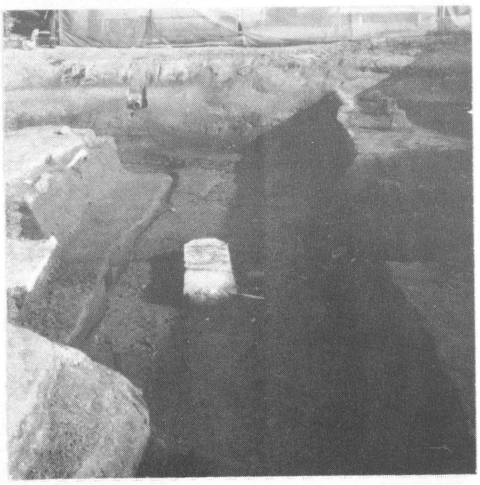
第3調査区全景

図版 4

第1調査区土坑2土層断面

第1調査区全景

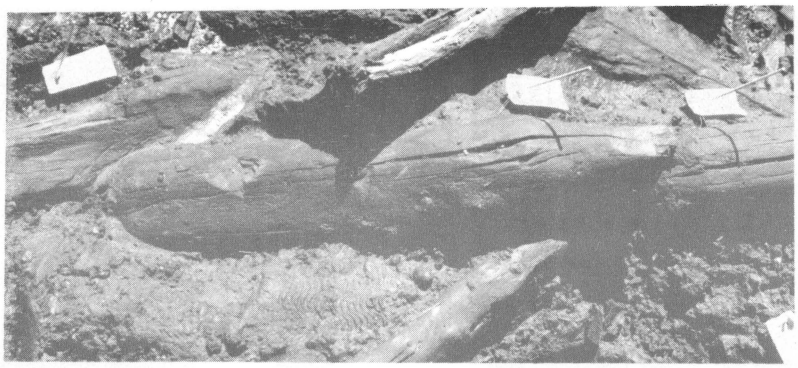
水路入口遺構全景



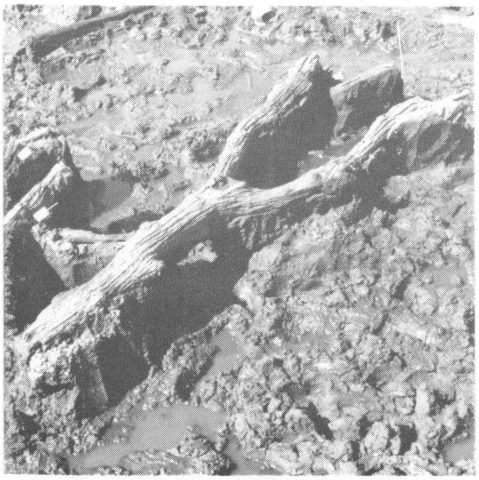
第2調査区全景

第2調査区水没状況

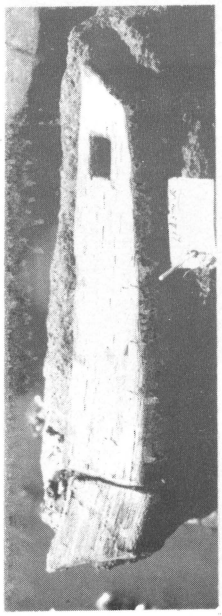
NO.1 9



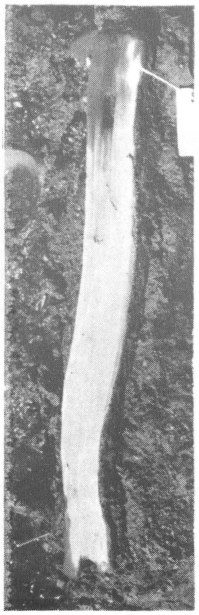
NO.1 8 遺物出土状況



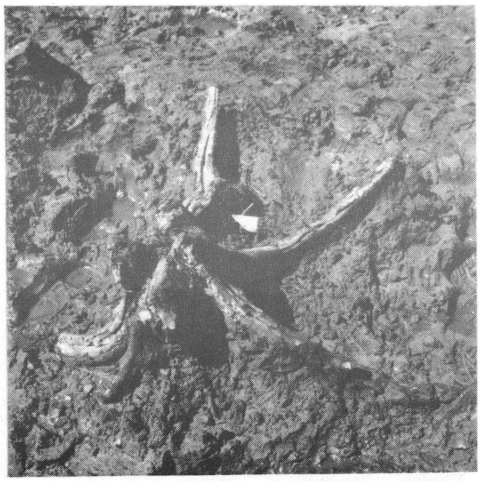
ニセアカシア（ハリエンジュ）出土状況



NO.1 2



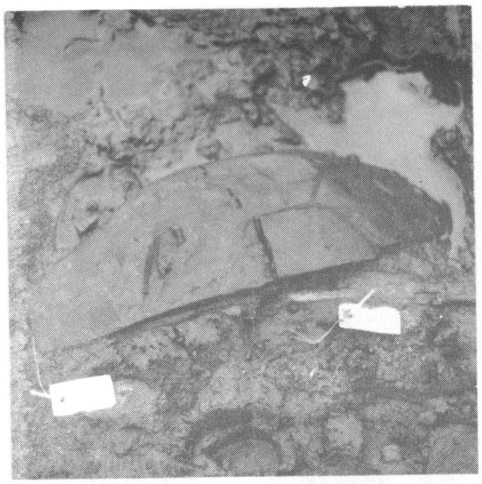
NO.1 5



D-6グリット柳株出土状況

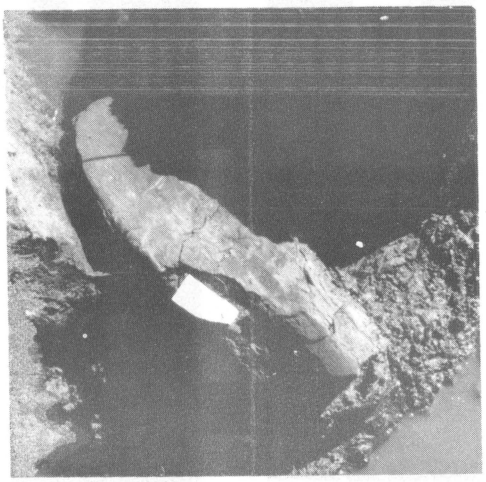
NO.1

図版 6



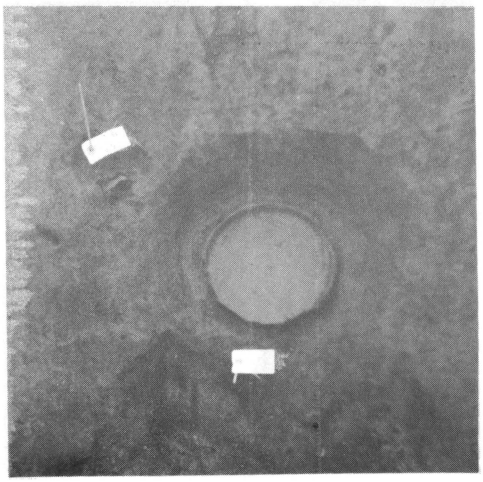
NO.24

NO.1 3 NO.9 1

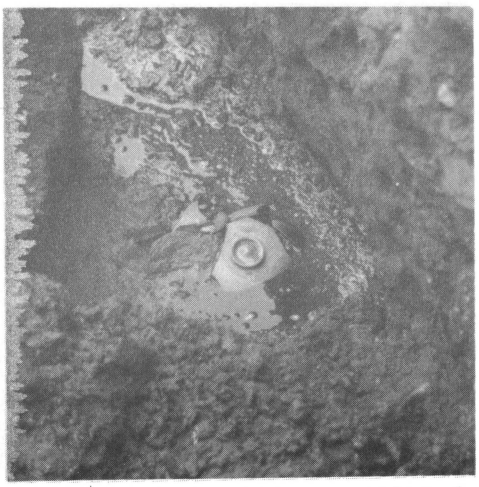


NO.22

NO.101

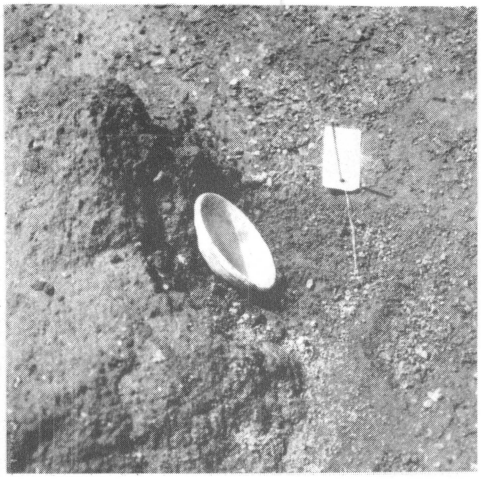


NO.8 1



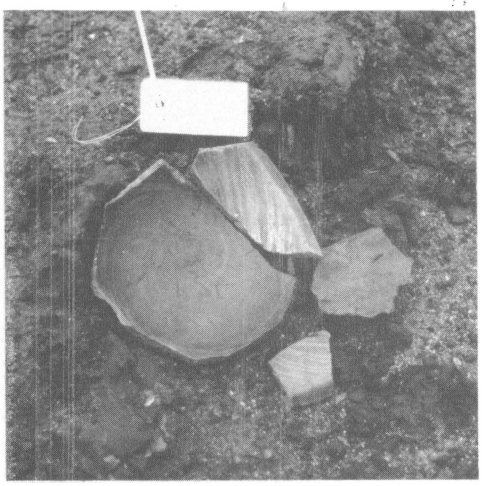
NO.120

図版 7

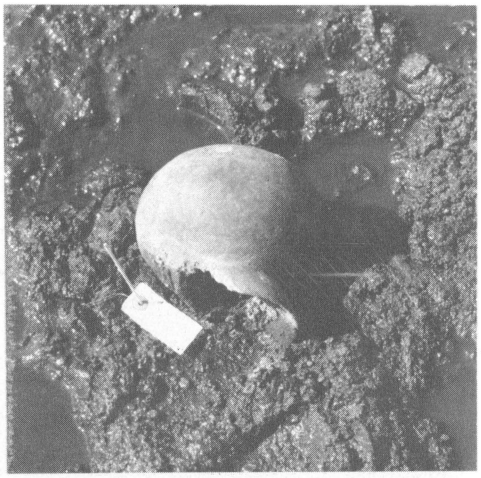


NO.92

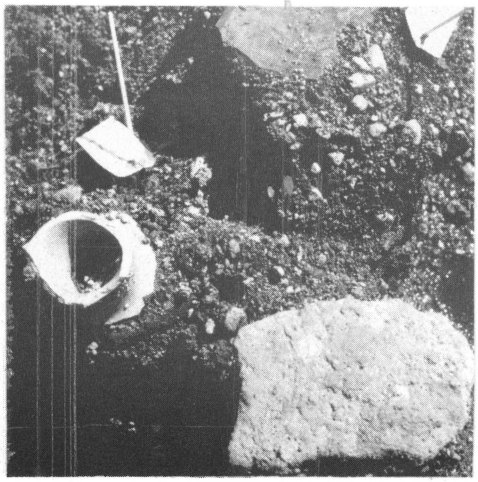
G-4グリット獣骨出土状況



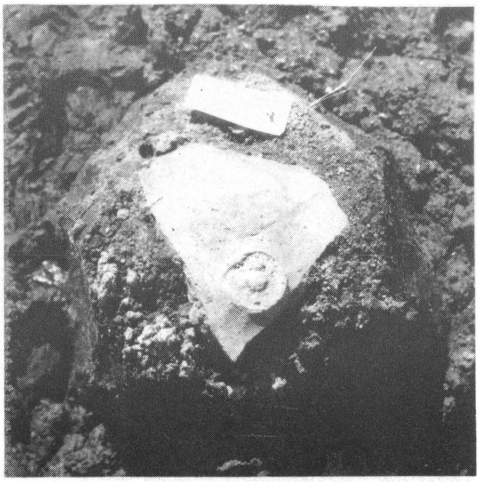
NO.52



NO.111

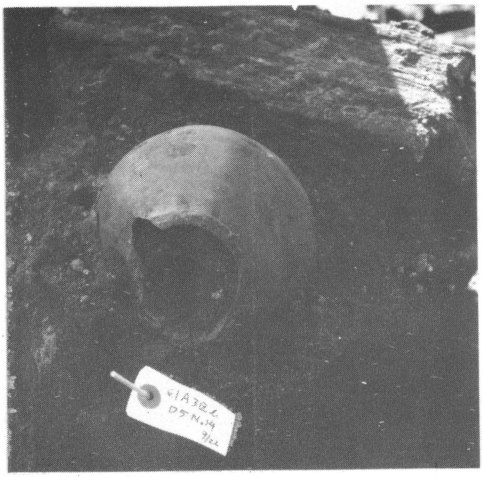


NO.124

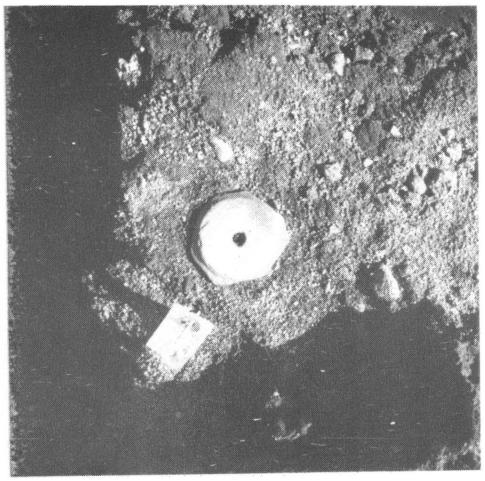


NO.66

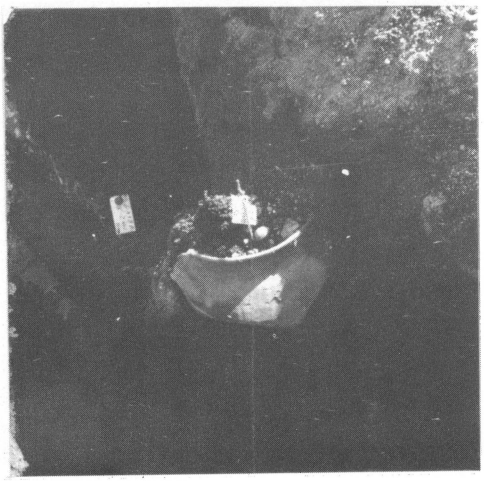
図版 8



NO.108

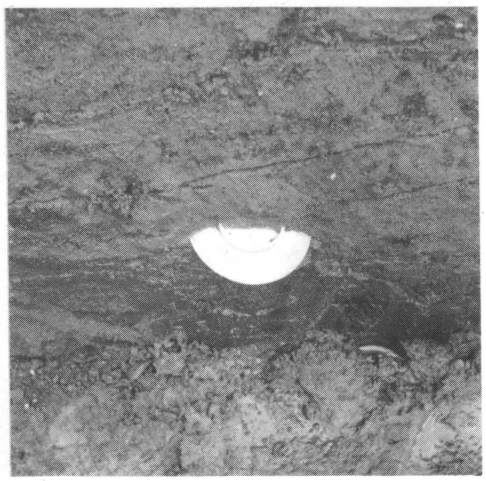


NO.60



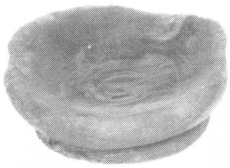
NO.105

NO.1 1 0



NO.80

NO.90

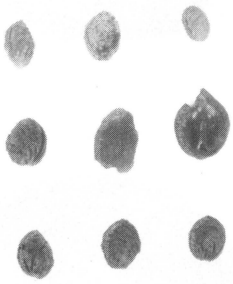


NO.6

NO.7

NO.8

NO.10



NO.11

NO.12

NO.13

NO.14

NO.15

NO.16

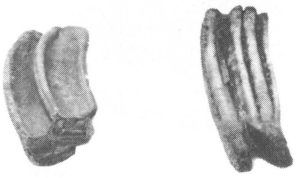
NO.17

NO.18

NO.19

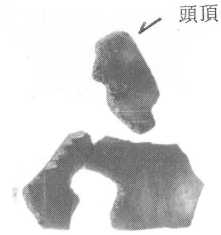
図版 10

NO.20

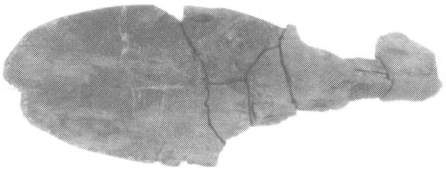


NO.25

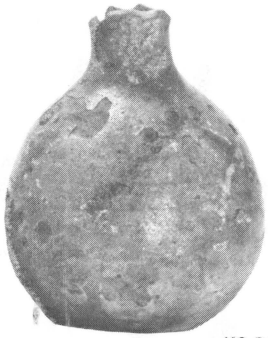
NO.21



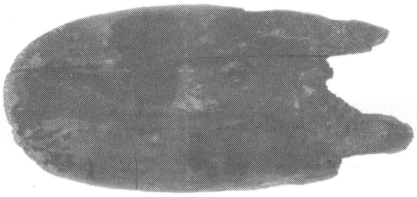
NO.26



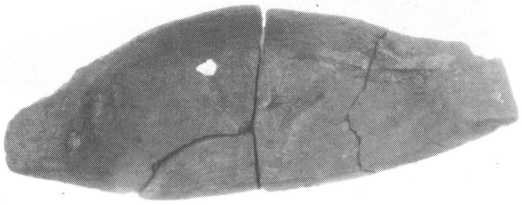
NO.22



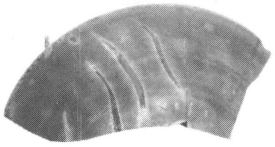
NO.28



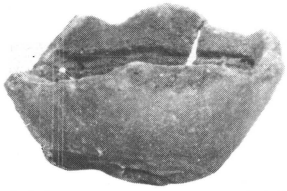
NO.23



NO.24



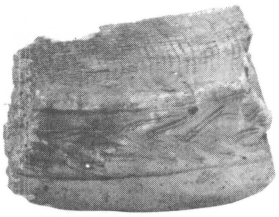
NO.29



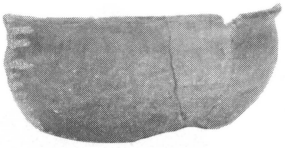
NO.33

NO.32

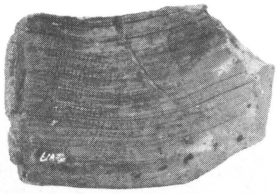
NO.40



NO.35



NO.49

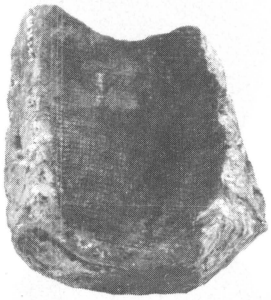


NO.38

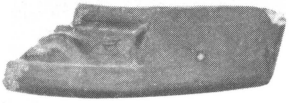
NO.39

No. 45　No. 46

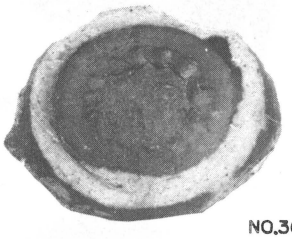
NO.34



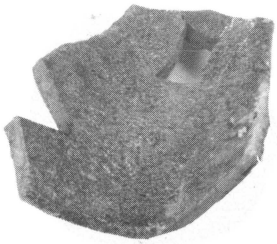
NO.42



NO.37

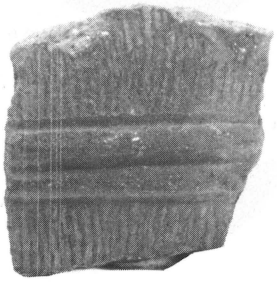


NO.36

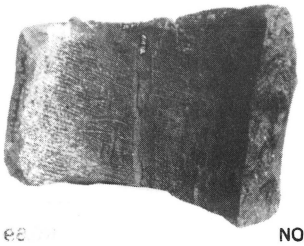


NO.44

NO.48



NO.4 1

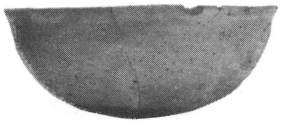


NO.43

NO.47

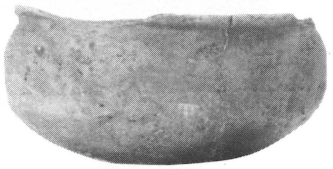
図版 12

NO.50

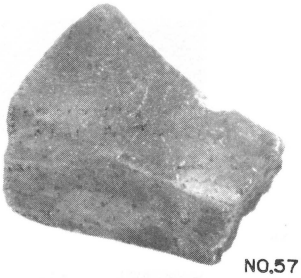


NO.5 1

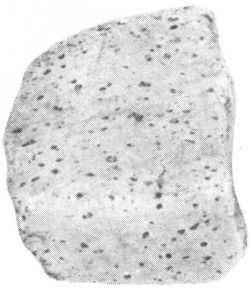
NO.52



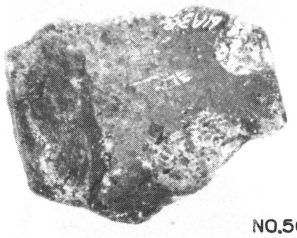
NO.53



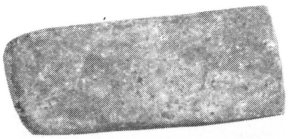
NO.57



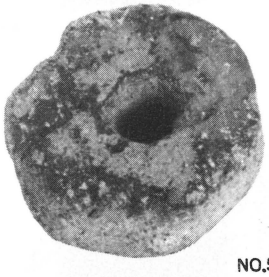
NO.55



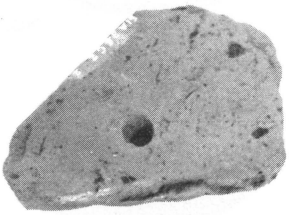
NO.56



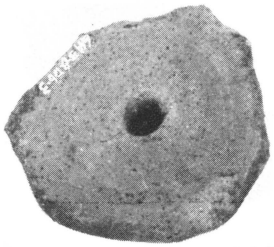
NO.54



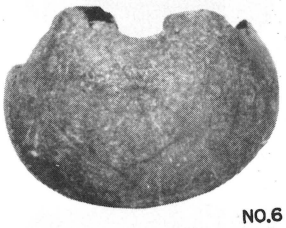
NO.58



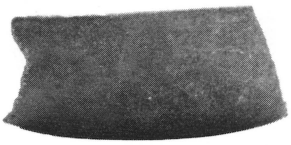
NO.59



NO.60



NO.6 1



NO.70

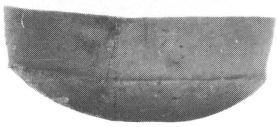
NO.69

NO.68

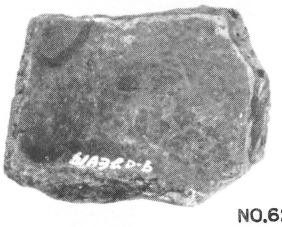
NO.7 1

NO.72

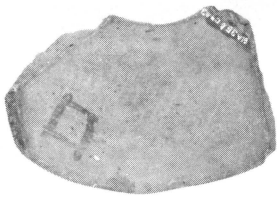
NO.73



NO.74



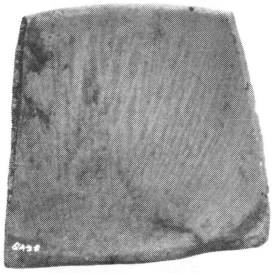
NO.62



NO.63

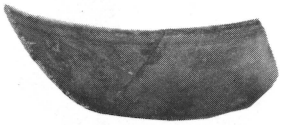
NO.66

NO.67



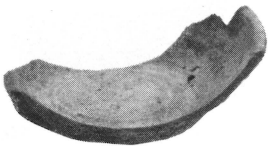
NO.65

NO.64



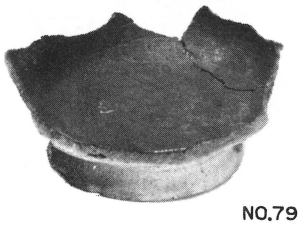
NO.76

NO.75



NO.77

NO.78

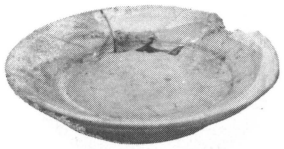


NO.79

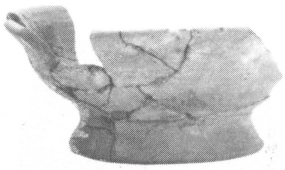
図版 14

NO.8 1

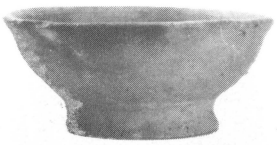
NO.80



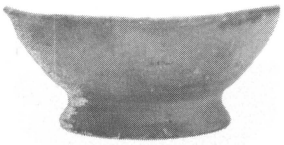
NO.82



NO.83

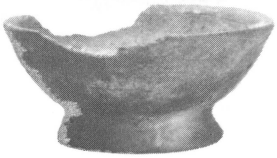


NO.84



NO.85

NO.88



NO.89

NO.90

NO.9 1

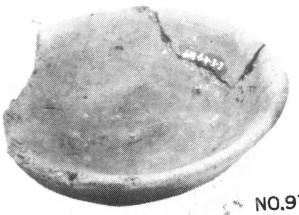
NO.92

NO.93

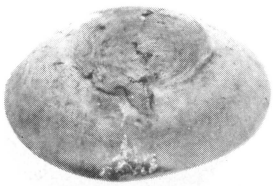
NO.94

NO.95

NO.96

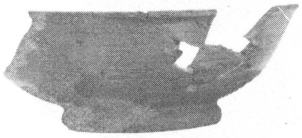


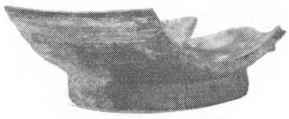
NO.97



NO.87

NO.86

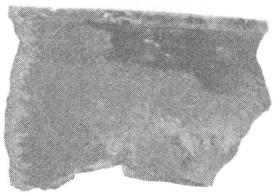

NO.98

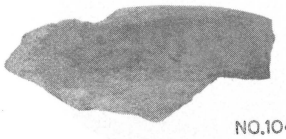

NO.99

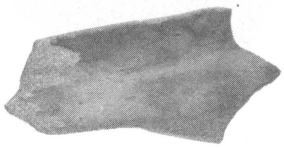
NO.100

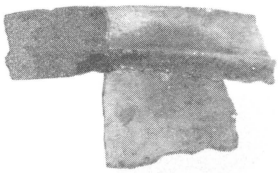
NO.101

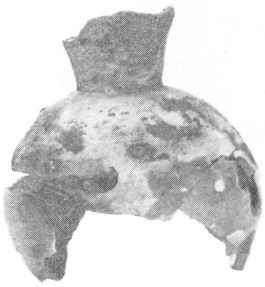
NO.103


NO.102

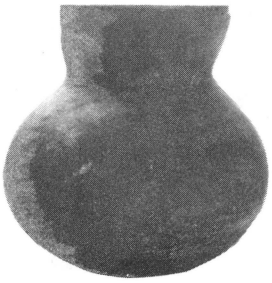

NO.104


NO.105


NO.106


NO.107

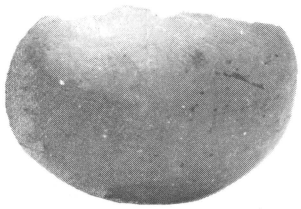
NO.108


NO.111

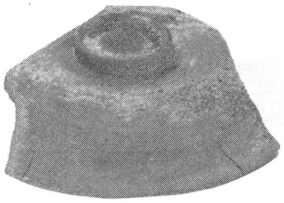
NO.110

NO.109

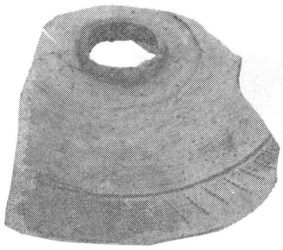
図版 16



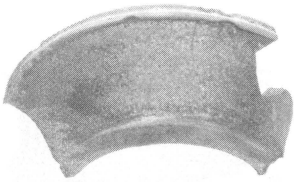
NO.112



NO.120



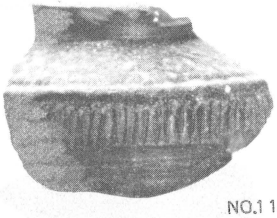
NO.125



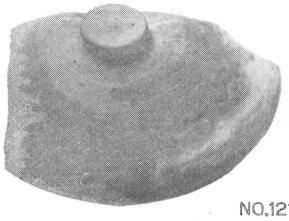
NO.113

NO.118

NO.122

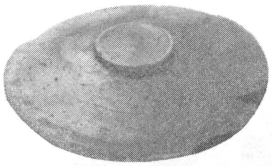


NO.114

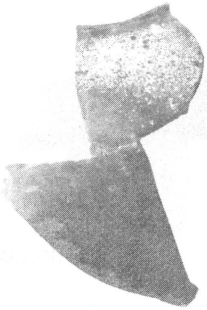


NO.121

NO.115



NO.126

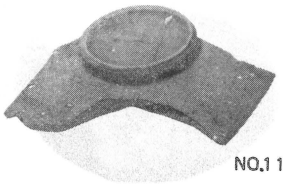


NO.123

NO.116

NO.119

NO.124



NO.117

寺　田　遺　跡

印　刷　　昭和６２年３月１５日
発　行　　昭和６２年３月２０日
編　集　　スナガ環境測設株式会社
発行者　　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
　　前橋市教育委員会
印刷所　　㈲サクラヤ印刷所